
東方幻想郷物語

心の壁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻想郷物語

【Nコード】

N7039F

【作者名】

心の壁

【あらすじ】

突然幻想郷に迷い込んでしまった普通の人、鷺宮静。静は元の世界に帰れるのか？心の壁初の二次創作。適当なペースで連載します。

第一章幻想入り 一話

「はあ、本当にこんなんで賽銭が増えるのかしら」

先日の戦いの末に、境内に作った守矢神社の分社を見ながら私はつぶやいた。

「流石に賽銭は増えないと思うぜ」

縁側で寝転がっている魔理沙が私のつぶやきに突っ込みを入れる。

「なんでよ」

「そんなもの作ったってすぐに参拝客が増えるわけじゃないだろ」

「まあ、そうなんだけどね……」

私は魔理沙とそんなやり取りをしながら、どんどん増え続ける落ち葉を箒でかき集めていた。

「なあ」

魔理沙が呼びかける。

「なあに」

私はひたすら動かしていた箒を止め、魔理沙の方を向いた。

「なんか最近面白いこと無いよな」

「この前妖怪の山までついて来たじゃない」

「んにゃ、あれ以外で」

「まあ、あれ以外だったらね。特に何も無いわね」

「だよな」

「私は面白いことより参拝客が増えてくれた方がいいんだけどね」

「そんな事聞いて無いぜ」

「まあ、そうよね」

と、その時だった。

神社に来るための階段のほうから誰かが来る気配がした。

「あら。誰かしら」

「ん？誰か来たのか？」

私は賽銭箱に幣を立てかけて階段の方に向かった。すると、そこにいたのは――

東方幻想郷物語

心の壁

気がついたときにはここにいた。

なぜか石の階段の途中に立っていた。

ほら、よく神社の本殿にいくために上る階段。あれ。

あれの中腹に、気がついたら立っていたのだ。

なぜかは知らない。

ここに来た経緯も覚えてない。

いったい僕はどこにしているのか。

まあ、とりあえず階段を上ってみることにした。

階段を上りつつ、自分の情報を思い出してみる。

自分の名前は鷺宮静。どこにでもいるただの高校生で、特に学校生活も面白く無いと思っているために毎日を怠惰に過ごしている。

よし。ここまで覚えているなら大丈夫だ。

とかなんとか考えてるうちに階段を上りきっていた。

すると、そこには赤と白の服を纏った巫女さんがいた。

「あら。普通の参拝客」

第一声がそれだった。

「なんですか。その普通の参拝客って」

「本当か！！普通の参拝客がこの神社に来たのか！！」

境内の奥から大きな声がして、今度は黒と白の魔法使いのような格好をした人が走ってきた。

「いや、だから、普通の参拝客ってことは、この神社には普通じゃない参拝客ばかりくるんですか。っていうかここどこですか」

「バカいうな。私は普通だぜ」

白黒魔女が言う。それに対して紅白巫女が続ける。

「何言ってるのよ。あんたはどう考えても普通じゃないでしょ」

「あのー」

「何言ってるんだ。私は普通の魔法使いだ。だから普通の参拝客だぜ」

「もしもしー」

「あんたの言ってること意味わかんないわよ」

「すみませーん」

だめだ。僕は完全に無視されている。

「で、ところでコイツは本当に普通の参拝客なのか？さっき妙なことを言ってたんだが」

「え？」

突然のように白黒魔女が僕に興味を向けたような台詞を飛ばす。

「何？妙なことって」

「ほら。さっき、『ここどこですか』って。門から来たなら博麗神社って書いてあるはずだぜ」

「あー。そうね。ってことはどういうこと？」

「紫や萃香みたいな普通じゃない参拝客。或いは幻想郷の住人ではない人間」

——幻想郷？なんだそれ。

「まさか。これで妖怪ってわけでもないだろうし——」

紅白巫女がこっちを向いた。

「——ってことは外の世界の人？」

「え？あ、いや。まず、幻想郷って何ですか？」

僕がそれを言った途端、紅白巫女は白黒魔女の方を向いて、

「確定ね」

と言った。

二話

「——ということは、要するに僕は今、僕がいた世界とは違う幻想郷という世界に紛れ込んでしまったと。そういうことですね」

僕は今、拝殿の中で紅白巫女さんと白黒魔女さんの二人から幻想郷の説明を受けていた。

「まあ、そんなトコだな。中々物分りがよくてやりやすいぜ」

幻想郷とは、僕がいた世界、ここで言う外の世界で忘れられたものや人などが集まる場所。それ故に目の前に座っている魔女や妖怪などが普通の人間より多いらしい――

「――って、僕は忘れられた人間なんですか！！？！？」

僕は白黒魔女さんに追いつがるように聞いた。

「おいおい。いくら幻想郷の主な入り方がそれだからって、何も全部が全部そうじゃないって」

白黒魔女さんは僕をはがしながら説明する。

「たまにこっちに紛れ込んでくるやつだっているんだよ。今回はたまたまお前だったってわけだ。なあ、霊夢」

白黒魔女さんは隣に座っている紅白巫女さんに振る。

「まあ、なくはないわね。その場合、主に紫が帰しちゃうからここまで来る事はないんだけど」

「まあ、そうだよな。そこらへんはあいつの仕事だよな」

と言って、白黒魔女さんは笑った。

「おっと、そういうばこの説明ばかりで私たちの説明もしてなかったな。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ。よろしくな」

そう言って、霧雨魔理沙と名乗る魔女はニツコリと笑って手を差し出してきた。

「あ、よろしくおねがいます」

僕は照れながら魔女の手を握り返した。

「全く、別に結婚するわけじゃないんだからそんなに照れんなよ。」

馬鹿みたいだぜ」

「あ、はい。……霧雨さん」

「あー、すまない。そっちの呼び方はやめてくれないか。魔理沙でいい。お願いだ」

なにやら地雷を踏んだようだ。紅白巫女もちょっと頬を歪めている。

「あ。はい。わかりました。じゃあ、魔理沙さんで」

「魔理沙でいい」

「え、あ。じゃあ、魔理……沙………で」

「だからそんなに照れるなって。こっちの調子が狂うだろうが」

そう言って、魔理沙はニツコリと笑った。苗字で呼ばれる事がそんなに嫌だったんだろうか。

「あ、あとこっちの紅白巫女は博麗霊夢。普通じゃない巫女だ」

魔理沙は自分の隣に座っている紅白巫女を紹介した。

「誰が普通じゃないなのよ。あんたより普通よ」

「本当か？」

「本当よ」

そんな会話をした後、二人ともこちらに向き直り、

「今紹介されたように、私は博麗霊夢。ここの巫女をやってるわ。」

苗字で呼ばれるのは慣れてないから、霊夢さんでも霊夢でもどっちでもいいわよ」

「じゃあ、霊夢さんでお願いします」

「分かったわ。じゃあ、あなたの名前を教えて頂戴」

霊夢さんもそこでニツコリと笑う。二人とも、笑顔が似合うと思った。

「えと、僕の名前は鷺宮静です。普通の高校生です。特に何が出来るってわけでもないです」

「うん。普通だな」

魔理沙にきっぱりといわれた。

「じゃあ、お前の事は静でいいな。決定だ」

魔理沙は勝手に決めた。

「まあ、とりあえずあなたを外の世界に帰すために外の世界に連れて行く人を呼ぶから」

霊夢さんは立ち上がり、縁側まで歩いたところで、

「まあ、それまではくつろいで待っててね」

「おう。分かったぜ」

「あんたには言っていないわよ」

そう言って、霊夢さんはどこかへ行ってしまった。

数分後、霊夢さんが一人で戻ってきた。

「あれ？紫は連れてこなかったのか？」

僕よりもくつろいで待っていた魔理沙が、霊夢さんのほうに顔だけ向けて言った。

「そこらじゅう呼んでも現れないのよ。いつもはすぐに現れるんだけど」

「必要な時にいないからな。あいつは」

「仕方ないわね。どうしましょうか」

「うーん」

僕が悩んでも何も策が浮かばないことなんか分かっているけど、なんとなく悩む雰囲気を出した。

「それについては私が報告しましょう」

突然の突風と共に二人の声とは違う声がした。

風と声の発生源の方を向くと、境内に女性が立っていた。

彼女は黒い羽を背中につけ、紅葉型のウチワを持ち、たけの高い下駄を履いていた。彼女も普通の人間じゃなさそうだ。

「あら、文じゃないの今日はどうしたの？」

「おおかた、静のことでも取材しに来たんだろ」

「え？どういうことですか？」

「あいつは天狗の新聞記者なんだよ。なにか事件があるとすぐに駆けつけて新聞にするんだぜ」

巫女・魔女の次は天狗ですか。

「まあ、彼の取材もありますが、少々報告でもと思ひまして」

「いったいなんのことかしら？ 私はあなたに探偵を依頼した覚えはないけど」

「いや、私も依頼された覚えはないですけど、貴方がたの尋ね人の情報なのでね」

「紫の？」

「はい。まあ、簡単なことです。つい先日、彼女は冬眠に入りました。まだ秋なので秋眠と呼ぶべきなのでしょうかね」

「冬眠ですって！！！！？」

「はい。そうです。式神からの裏も取っております。それ故に、彼女が目覚めるまで彼は外の世界に戻れません」

「はあ。ここ数日見ないと思ったら、冬眠だったのね……」

「そのようですね。おっと紹介が遅れました。私、天狗の射命丸文と申します。今後お見知りおきを。静さん。ああ、私の名前は文でいいですよ」

とつぜん僕に振られたので僕はちよつと驚いた。

「あ、は、はい。よろしく。鷺宮静です」

「よろしく。ということで、ちよつと取材をしたいんですけどお」
「そういいつつ、文さんは拝殿の方にಾಗಿ始めた。」

「はいはい。取材は後にしてくださいねー。ちよつと私たちは話し合う事があるからー」

あがり始めた文さんを拒絶するように霊夢さんはふすまを閉め始めた。

「ああっ！！待って！！今後について話し合うなら私も混ぜた方がいい考えが出来ますよ！」

「うん。まあ、それもそうだな。霊夢、入れてやれ」

「えー、それ本気で言ってるの？ 魔理沙」

「取材させなきゃいいだけだろ。今後の静の話について文の情報力
は必要だろ」

「まあ、そうだけどね」

「ほらっ、私が必要ですよねっ!」

ふすまの向こうから文さんが叫ぶ。

そして、霊夢さんがしぶしぶすまを開けると、飛び込むように
部屋に入ってきた。

「しょうがないか。静は今日来たばかりだから、取材は今日厳禁
ね」

「わかりましたよ。それでは、始めますか」

僕は、これから大丈夫なのだろうか……。

三話

霊夢さんが全員分のお茶を入れたところで、拝殿の中の四人は輪になって話し始めた。

「まあ、紫が寝ちまったんだったらもう起きるまで対処の仕様がないだろう」

「そうよねー。その間、どうしようかしら」

「ところで」

先ほどから気になっていたことを僕は聞く。

「さっきから話題に出ているゆかりさんってどんな方なんです？その人と僕が外の世界に戻る方法ってどう関わってるんですか？」

すると、僕から見て右からから順番に、

「スキマ」

魔理沙、

「まんじゅう泥棒」

霊夢さん、

「境界を操る程度の能力を持った幻想郷最強と呼ばれる妖怪ですね。現在幻想郷に住んでる妖怪の中でも最古の妖怪だと言われていますね」

文さんと発言してくれた。

「境界を操る程度の能力を使用して、彼女は貴方みたいにごく稀にこっちに紛れ込んでくる人を外の世界に帰してあげるんですね」

文さんの説明は続く。

「しかし彼女は普段から寝てばかりのぐうたら妖怪で、主に活動時間は夜。昼間は殆ど睡眠に使っていて、さらに冬眠もするとの事。ちょうど先日、彼女は冬眠を始めてしまったので、能力を使って貴方を外の世界に帰してあげる事が出来なくなっていました。ということですね」

文さんの二人の発言に比べると凄く長い説明は終了した。正直、

文さんの説明しかゆかりさんの凄さが分からなかった。さすが新聞記者。っていうかまんじゅう泥棒って……。

「私たちが悩んでいる原因は文が言ってくれたとおりだ。これじゃあお前は帰れないんだ」

「冬眠からおきれば何とかなるけどね」

「その冬眠ってどれくらいかかるんですか？」

「普通に考えて――」

文さんが少し考えて答えを出す。

「――春ごろまで起きませんよね」

「春ですか！！？？半年くらい先じゃないですか！！！！」

僕はそりゃあもう驚いた。半年も僕は幻想郷にいないてはならないのか。

「まあ、冬眠ですもんね」

文さんは冷静に返してくる。

「まー、こんな時期に来ちゃったことを悔やむんだな」

魔理沙が肩を叩いてくる。なにも慰めにならない。

「こうなった以上、当分は幻想郷で生活することになるわよね」

霊夢さんが自分のお茶をすすりながら言う。

「そうになると、どこで寝泊りするかが問題よね」

「そういえばそうである。寝泊りする場所がなければ生活も出来ない。」

「ここに住まわしちゃえばいいじゃねえか」

「ここは私一人が生活するので精一杯。まあ、部屋はあるけど食料が。という意味でね」

「ああ、そうか。じゃあ、私の家に来るか？」

「やめなさい。あんたの家にいったらどうなるか分からないわ」

「まあ、そうですよね」

霊夢さんの妙な言動に文さんも同意する。一体どんな家なんだろうか。

「私の方も流石に。なんせ妖怪だらけの山だし、そもそも人間は入

れませんし」

「そうだったら、僕はどこにいけば？」

「人間の里でお世話になるのが無難なところですよ。あそこなら理解のある慧音先生や、御阿礼の子もいますし」

「あれ？人間の里なんてものがあるんですか？」

僕は拍子抜けした。そんなものがあるんだったら最初っからそこを勧めたほうがいいような気がしたんだが。

「人口は少ないんですけどね。少なくとも、魔理沙の住んでる魔法の森よりは安全ですよ」

どれだけ危険なんですか。魔理沙の家は。

「まあ、泊まる所は向こうに行って聞いてもよさそうですよね」

「そうね。ここで話しているよりもそっちの方がいいかもしれないわね」

決まったようだ。

「じゃあ、行きますか」

霊夢さんがそう言って立ち上がるのをきっかけに、みんなが一斉に立ち上がり、ぞろぞろと境内に出た。

「人間の里って大体どれくらいかかりますかね？」

「そんなのすぐにつきますよ。そんなに遠くないですし」

文さんは笑いながら僕と並んで歩く。

すると、後ろからなにやらバンバンと音がした。

「ん？何の音ですか？」

僕が振り向くと、霊夢さんが神社の賽銭箱の隣に立っていた。

「賽銭。この幻想郷で生活するうえで安全に暮らせますようにって祈願しなきゃ」

霊夢さんの顔は先ほどからしてる笑顔と同じ笑顔のはずなのだが、なにか違うオーラが発せられている気がしていた。

「霊夢……。お前そこまでして……」

魔理沙が呆れている。

「そうですね。じゃあ、神様にお祈りしましょうか」
僕が素でそういうと、

「静。お前は偉いよ」

と魔理沙に肩を叩かれた。なんのことだか分からない。
とりあえず、僕はポケットから財布を取り出そうとした。
しかし、ポケットには何も入ってなかった。

「あれ？財布が……」

「ん？どうしたんだ？」

「いや、財布がないんです……」

「なんですって!!」

霊夢さんが大きな声を出して近づいてきた。

「そういえば僕、持ち物をなにも持ってない気がするんですけど……」

「あちゃー、それは失敗だったな。残念だったな、霊夢」

「うう……。おさいせん……」

霊夢さんは本当に残念そうな顔をしていた。

「まあ、気を取り直して行きますか。里に」

文さんが気落ちした霊夢さんを励ますように催促した。

「あー、そのことなんだが、私はこのあとアリスに用事があるから抜けるぜ」

突然のように魔理沙がそう宣言した。

「あれ？里には行かないんですか？」

と僕が聞くと、

「ああ、実は急ぎのようだな。すっかり忘れてたんだぜ。暇になったら後で合流するから、それじゃあな」

そう言って、魔理沙は持ってた箒にまたがった。

「あ、はい。それじゃあ」

「じゃあね、魔理沙」

「それでは」

僕たちが見送って、魔理沙は箒に乗って飛んでいってしまった。

星の形をした光の粒を撒き散らしながら。

「さて、改めて行くとしますか」

そう言っ、文さんはふわりと宙に浮いた。

「そうよね。さっさといっ、さっさと済ませましよう」

そして、霊夢さんも宙に浮いた。

……………あれ？

みなさん空を飛べるんですか？

いや、飛ばれるんですか？

「いやっ、僕空飛べないから！」

と僕は思わず突っ込んでしまった。

「あら。そういえばそうでしたね」

と文さん。なんでそんなこと忘れてるんですか。

「そうだったわね、じゃあ、静に合わせましょうか」

霊夢さんはそう言っ、地面に足をつけた。

「ありがとうございます……」

「私は歩くのが面倒なんで二人に合わせた速度で飛びますね」

文さんは意外と面倒くさがりらしい。

「じゃあ、行きますか」

そして、石階段への一步を僕たちは踏み出した。

四話

獣道である。

神社から出た後、僕たちはひたすら獣道を歩き続けていた。

両側を深い森に囲まれ、神社を出る時はまだ日が照っていたはずなのに薄暗く、見通しも悪く、気分が悪くなるような道だった。

「これ、まだ歩くんですか？」

「もうちょつと先ですね。疲れましたか？」

そう言う文さんは疲れてないのは当たり前だと思う。飛んでるんだもん。

「そういえば、すぐそこと言ってませんでしたっけ？文さん」

「あ、あれですか。まあ、飛んだらすぐですよ」

「やっぱりそういうことだったんですね……」

そのときである。道の両側にある茂みの中からガサガサと音がした。

その音に対して僕が反射的に身構えると、音がした茂みからこの世のものとは思えない怪物が現れた。

「キシヤー」

「うわああああ！！」

と僕が驚くのにも他の二人は動じずに、霊夢さんがどこから取り出したのか分からない勾玉の模様が入った大きな玉を怪物に投げつけた。

それだけで怪物は気絶をしてしまったようで、倒れたまま動かなくなってしまった。

先ほどからその連続である。この獣道、居心地が悪い異常に怪物が出るのである。二人はものともせず撃退してしまうのだが。

「やっぱり、ここって僕みたいな人間が通る道じゃないんですか？」

僕は霊夢さんに聞いた。さっき投げつけた玉はいつの間にかどこ

かに消えてしまった。

「最近妖怪が多くなっちゃってね。あいつらはただおどかすのが目的でやってるんだけど、それで本当に驚いちゃう人間たちが通らなくなっちゃってさ。だからウチの神社にも参拝客が少なくなっちゃってねー」

「そうなんですか……」

どうやら霊夢さんは参拝客の減少についても凄く残念に思っているようだ。

「ほら。静さん。もう出口が見えてきましたよ。あそこを抜けければすぐですよ」

文さんがウチワで指した方向には出口から差し込む光が見えた。

「あー、やっと里に着くんですね」

「あと少しね。また妖怪に遭わなければいいけど」

霊夢さんのその言葉通り、後の道では妖怪には遭わずになんとか獣道を抜ける事が出来た。

「おつかれさまです。ここが人間の里。幻想郷で最も多くの人間が住む場所です」

僕たちはようやく、人間の里にたどり着いた。

「ここでは、さまざまな店があり、普段生活するうえでほとんどのものが揃います。たまにそれを求めて妖怪たちも買出しに来たりしますね」

「え、それ、大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫です。ここに住む人間は襲ってはいけないという暗黙の了解がありますからね」

「へえ、そうなんですか」

「妖怪たちの為に夜中まで経営してるお店もあるんですよ」

「妖怪と人間の共存が成り立っているんですね」

「そうなんです。それが幻想郷のいいところです」

という風に文さんの幻想郷情報をまた教えてもらった。

「ところで、どっちにたずねるつもり？ 私はとりあえず、人間の里に来てから考えようと思ってたんだけど」

「まあ、泊めてもらう事を考えるとしたら、慧音先生のほうに行った方がいいですね。彼女はよき理解者ですし」

「じゃあ、そっちに行きますか」

僕は、導かれるままに彼女たちについていった。

五話

「すみませーん。慧音先生はいますかー？」

一昔前にあったような木造の建物の前で文さんは戸を叩いた。
すると、少し間があつてから中から返事があつた。

「はいはい」

と言って、戸が開けられた。中から出てきたのは長い銀髪の人の良さそうな女性だった。彼女が二人の言う、『慧音先生』なのだろうか。

「おや、文に霊夢。今日はどうしたんだ？」

「いや、ちよつと今日はお願いがあつてね」

と、霊夢さんが切り出した。

「お願い？それは、そっちの見慣れない人の関係か？」

「そうなのよ。簡単に説明しちゃうけど、彼は外の世界から偶然紛れ込んだ人で、外の世界に帰そうにも紫が冬眠に入っちゃったから帰せないの。だから、しばらくの間貴女の家には預けられないかと思つて」

「あらら、それは大変だな」

「で、どうかしら？」

「ええと、私は構わないのだが、満月の夜になったら、少し危険かなと思う……」

『慧音先生』だと思ふ女性は苦笑しつつそういった。なんだろう。満月の夜はなぜ危険なんだろう。妖怪とか出てきたりするのだろうか。

「ああ、そうだったわね」

「いやあ、それは忘れてましたね」

霊夢さんと文さんはその危険な原因を知っているが忘れていたようだった。お二人さん、そんなこと忘れないでください。

「そういうことなので、私の家で引き取る事は少々危ういので、稗

田さんのお宅とかはどうでしょう？彼女の家なら使用人もいますし、空き部屋もあるでしょうし」

「うん。そうですね。最初も慧音先生か御阿礼の子の家にするかで少し悩んだんですよ」

「へえ、それでまず私の家に？」

やはりこの人が慧音先生のようにだ。

「それでしたら、やはり稗田さんのお宅を訪ねたほうがいいですわ」

「ええ、そうしてみるわ」

「力になれなくてすまないな」

「いやいや、大丈夫ですよ」

そう言って、僕はまた二人に連れられて、慧音先生宅を離れた。

「ところで、あの人が二人が言ってた『慧音先生』だったんですか？」

「おや、そういう紹介してませんでしたね。そうですね。彼女が慧音先生、上白沢慧音です」

「満月の夜が危ないってあれは一体何なんですか？妖怪でも出るんですか？」

「ああ、それはですね」

文さんの説明モードが始まった。

「彼女は後天性の獣人なんです。満月の夜になるとハクタクという獣になってしまいうんですよ」

「え？獣人？狼男みたいなやつですか？」

「はい。そのようなものです」

驚いた。そんなものもこの幻想郷にはいるのか。というか後天性とか先天性とかあったんだ……。

「ハクタク自体はそれほど危険な種類の獣ではないんですが、彼女は寺子屋の教師をしているので、それで溜まった仕事をハクタク状態で一気に片付ける故に、ハクタク状態のときは気が立ってるとき

が多いんです。彼女の得意技は頭突きでして、人間の時はただの頭突きなんです。が、ハクタク状態になると角が生えてしまうんですよ、そのときに頭突きされると痛くて痛くて」

文さんは説明の最後で自分のお尻を擦っていた。もしやハクタク状態のときに頭突きをされた事があるのだろうか。

「それで、危ないってことなんですね」

「はい。そうなりますね。まあ、それ以外ならいい人なんですけどねえ」

「見えてきたわよ。阿求の家よ」

「おや、意外と早かったですね。説明してたからでしょうか」

「そうですね」

そこには、やはり時代劇とかでよく見る、少し昔の日本家屋が建っていた。

「すいませーん。私、『文々。新聞』の射命丸文と申しますー」
そう言って、文さんは門を叩いた。

すると、奥から返事があり、門が開けられた。

「はい。射命丸様ですね。どのようなご用件でしょうか」
中からは和服の女性が現れた。

「稗田阿求さんに用事があって参りました。阿求さんはご在宅でしょうか？」

「あ、はい。いらっしゃいます。では、お上がりになってお待ちください」

僕たちはその和服の女性に促されるように座敷に上げられた。

この家は、時代劇とかで出てくる家ほど大きくはないが、中々の大きさの屋敷だった。何坪くらいあるんだろう。この家。

「えと、その阿求さんって、結構凄い人なんですか？」

僕は待っている間に出されたお茶を飲んで二人に聞いた。

「稗田家は幻想郷の中でも由緒正しい家系ですからね。千年以上前から存在している事が確認されています」

「そんなに昔からですか」

「そうです。それに彼女は、御阿礼の子と呼ばれ、千年以上前から転生を繰り返している稗田阿礼の九代目になった子なんです」

「転生ですか？」

「はい。稗田阿礼は求聞史の能力と言って、見たものを全て記憶できる能力者でした。それを利用して、この幻想郷に住む人間のために幻想郷の妖怪図鑑や幻想郷の危険なところを纏めた幻想郷縁起を書き記しました。そして、彼はその求聞史の能力を後世にも役立てたくて自分を転生させることを決め、閻魔様に許しをもらって、転生する事が出来、今に至るということです。ちなみに転生しても幻想郷縁起に関する記憶しか残らないようです。それが代償の一部のようです」

あいかわらずの説明モードである。

「転生にはまず、生きている内から閻魔様に許しを貰い、転生後の肉体を用意してもらうために百年余り時間がかかり、実際に死亡してからそれまでの時間は地獄の閻魔様の下で働くこととなります。それでいて、御阿礼の子の場合は幻想郷縁起に関する記憶しか残らないということで、ハイリスクローリターンな事なんです。転生術は」

「へえ、そうなんですか」

「ですので、御阿礼の子のように幻想郷縁起を書き続けるという転生をし続けないといけないようなことでもない限り、転生なんかするもんじゃないです」

「それをこの家の中で言うんですか……」

「大丈夫よ。文だから」

「霊夢さん、それ答えになってません……」

「おや、ちょうどいいところで来たようですね」

文さんがそういったとき、部屋のふすまが開かれて、和服姿の少女が現れた。

六話

「あら。靈夢さんも来ていたんですか？お久しぶりです」
和服姿の少女の部屋に入ってきて第一声はそれだった。

「久しぶりね。元気にしてた？」

「はい。もちろん」

そういいつつ、僕たちの前に少女は座る。

「おや、見慣れない御方もいらっしゃるようで。紹介が遅れましたわ。私、九代目御阿礼の子、稗田阿求。稗田家の当主です」

彼女は深々と頭を下げて自己紹介をした。

「あ、はい。えと。鷺宮静です。よろしく」

僕もつられて頭を下げた。

「本日は彼に関する事で来たんですよ」

「おや、それはどんな御用で？」

靈夢さんと文さんは先ほど慧音先生にしたように簡潔に事情を説明した。

「あらあら。それは大変ですね。こんな時に紫様が冬眠に入ってしまったとは……」

「そうなんです。で、彼女の冬眠が終了するまでのあいだに彼が寝泊りする場所を確保したいと思ひましてね、お願いできないでしょうか」

「僕からも、お願いします」

「私からもお願いするわ」

三人揃ってほぼ土下座状態でお願いした。

「いや、特に断る理由もないのでお引き受けしますよ。まだ余っている部屋もあったはずですし」

その後、阿求さんは近くにいた女中と少し話をして、その女中は部屋の外に待機している人にそれを伝えたようで、部屋の外から人が離れる音がした。

「ただいま、部屋の用意をさせていただいていますわ」

「ありがとうございます」

僕はまた頭を下げた。なんとか生活できる場所を確保できたのだ。

「食事などは女中と同じものでも構いませんよね。と言っても、私も同じものを食べてますが」

「あ、はい。大丈夫です」

「それなら大丈夫ですね。これで決定という事で」

「ええ、そうですね」

「ああ、ようやく決まってよかったわ」

それから、三人は世間話を始めた。僕はたまに相槌を打ったり、説明をうけたりしながら三人の会話を聞いていた。

ちらりと外を見ると、日が傾き始めてきていた。

「おや、もうこんな時間ですか。静さんの滞在場所が決まったことですし、私はそろそろ帰りましょう」

「そうですね。私も帰ろうかしら」

「そうですか。では、玄関までお見送りしますわ」

そう言って、全員で玄関先まで移動した。

「まあ、何はともあれ、何とかかなりそうでよかったです」

「そうですね。あとは紫の目覚めを待つだけね」

「あ、そうだ。静さん」

そう言って、文さんは僕に向き直った。

「何か困った事があったら私の名前を叫びながらこの鈴を鳴らしてください。幻想郷一のスピードで駆けつけますよ」

文さんはそう言って、僕に紅葉型のキーホルダーが付いた鈴を渡してくれた。

「たまに私の手が放せないときは部下の天狗が来ると思いますが、まあ、大体の確立で私が飛んでいけるでしょう」

「部下の天狗ってあの犬？」

「まあ、そうですね」

話しているうちに、僕たちは玄関先までたどり着いた。

「それじゃ、私たちは帰るから。阿求、静の事よろしくね」

「はい。わかりました」

「それでは。充実した幻想ライフを」

「さようなら。二人ともありがとうございました」

僕は深々と頭を下げた。

「それじゃあね」

「また会いましょう」

そして二人は後ろ向きにジャンプしたと思ったら、そのまま高く飛んで行ってしまった。

「行ってしまいましたね」

「はい」

「それでは、戻りますか。部屋のほうに案内しますよ」

「あ、ありがとうございます」

こうして、僕は一時的だが幻想郷に住む事になったのであった…
…。

第一章・幻想入り 完

第二章 幻想郷の日常 七話

「ん……」

朝か……。

僕は布団から起き出した――

――って、僕の部屋って布団だったっけ？僕の部屋はベッドだったはずなんだが……。

というかここはどこだ？僕の部屋には思えないんだが……。

和室だし、僕布団だし、ここは一体……？

「鷺宮様」

僕の後ろのふすまから声がした。僕は突然様付けで呼ばれたので驚いて振り向いた。

「え？誰ですか？」

「あ。私です。女中の小夜子です」

女中？小夜子？僕の記憶から繋がらない……。

「あの？鷺宮様？」

「えっと、ここって、どこですか？」

「え？あの、稗田家当主、稗田阿求様のお屋敷でございます」

ああ、それで繋がった。僕は昨日、突然幻想郷という僕が住んでいた世界とは違う世界に紛れ込んでしまったんだっけ？

「鷺宮様？」

「ああ、はい。分かりました。今着替えます」

そうだ。今日から幻想郷での生活が始まるんだった――。

東方幻想郷物語 第二章 心の壁

阿求さんは基本的に離れで暮らしているらしく、食事もそちらで

食べているらしい。

僕は阿求さんに呼ばれ、朝食と一緒に食べるようになった。

「おはようございます、静さん。昨夜はよく眠れましたか？」

既に席に着いていた阿求さんは僕が部屋に入ると同時にそういった。

「はい。ちょっと、ここに来てた事を忘れちゃうくらい……」

僕は用意された食事の前に座った。

「ふふ。そうですか。それはよかったです」

阿求さんはクスリと微笑んだ。

「昨日の今日ですから、今日はゆっくり休んでいらしてください」

「それなんです、僕、今日はこの里を少し周ってみたいと思います」

「あら。そうなんですか？」

「はい。短い間ですがこれから生活する場所なので、少し見て行きたいので」

「そうですね。じゃあ、私もお付き合いますわ」

「え？ 阿求さん、来てくれるんですか？」

「ええ、私も里の散歩は幻想郷縁起を執筆して以来してませんから。たまにはいいでしょう。ついでと言ってはなんです、色々な場所を紹介させていただきますわ」

「あ、ありがとうございます」

「それでは、食べましょうか」

「はい。そうですね。いただきます」

「いただきます」

そうして、僕たちは朝食を食べ始めた。

八話

「それでは、阿求様、鷺宮様。お気をつけて」

僕たちは朝食後、早速出かけることにした。僕たちというのは僕と阿求さん、そして阿求さん専属の女中・百合絵さんの三人の事である。決して二人きりのデート感覚で散歩するわけではない。

「それでは、参りますか」

「あ、はい」

阿求さんが外出する時はいつも専属の百合絵さんが付き添いで来るらしい。阿求さんは生まれつき病弱らしく、出先で調子が悪くなったりするといけないのでということらしい。

「里に來れば、生活するうえでのはとんどのが手に入るって聞きましたけど、そんなにいろんなお店があるんですか？」

「ええ、そうですよ。というか、お店なんてものはほとんど里にしかありませんから」

「ああ、そうなんですか」

阿求さんの屋敷は里の中でも端の方にあるようで、店が立ち並ぶ通りに来るまで少し歩いた。

「ここが里の商店街です。ここにはさまざまなお店があって、人間や妖怪など関係なく利用するのですよ。妖怪と言っても、ほとんどが人間と同じような姿形ですが。よく見ると人間には付いていない動物系の耳や尻尾、または羽が生えている人がいるはずです。それが妖怪です」

「へえ。あ、本当だ。文さんみたいに羽が生えてる人がいる」

「私の羽は鴉の羽なんで、あんなに綺麗に白い羽じゃないですよ」

「そんなこと分かってますけど……ってあれ??? 文さん!!!!」

いつの間にか、文さんが僕の隣にいた。

「おや、どうしたんですか？」

「いや、いつからいたんですか？」

「いや、さっきからいましたよ。ねえ、阿求さん」

「ええ、そうね」

あれ？気がついてないのは僕だけだったのか？

「で、ところで文さんはなんでここにいますか？」

「いやあ、昨日は来たばかりだからということで霊夢に取材を止められてましたからね。きけば今日は里を周るそう。ですので、里の紹介と共に取材でもと思ひまして」

「ああ、そうですか……」

まあ、文さんの説明は結構分かりやすいからいいんだけど……。

「ここには雑貨屋から御茶屋、酒場や花屋などさまざまなお店が並んでいるんです。あと、もう少し先に行くと、龍神の石像というものがあって、河童が作った天気予測の像があるんですよ」

「なんですか？それ。河童？」

「はい。私が住む妖怪の山に住んでいる河童です」

「なんで河童がそんなもの作ってるんですか？」

「私が住む妖怪の山は結構文明が発達してましてね。私たち天狗は写真・印刷・出版の技術。河童たちは鉄鋼や建築、道具の作成などの技術があるんですよ」

「なんか、イメージと全然違いますね」

「うーん、外の世界の人間が想像する天狗や河童のイメージってものがどうなのかはしりませんが、とりあえず、こっちの世界ではこんな感じですよ」

「へえ」

「外の世界ではどんな感じなんですか？その辺りの事」

「いや、こっちの世界での天狗や河童がやるような事は全部人間でやりますよ。むしろ天狗や河童なんてものは、僕たちの世界では人間を驚かすような存在でしかイメージがないんです」

「へえ、そうなんですか。もっと外の世界の事を教えて欲しいですね。文さん」

「ええ、そうですね。お互いにね」

なにやら妙な二人が揃ってしまったようだ。僕はこの二人を見た後に、付き添いの百合絵さんに目を向けた。すると、

「阿求様は歴史を記録する方ですから。そういうことには興味を抱くですよ。射命丸様もその手の事を生業とするので、私からは何も言えません」

と、百合絵さんにまでも突き放されてしまった。

九話

結局、僕の住んでいた世界の事は、後日話すことにして僕たちは里の散歩を続けることにした。

「この角を曲がると、寺子屋ですね」

角を曲がると、そこには確かに見覚えのある風景があらわれた。

「たぶん、まだ授業中ですが、軽く覗いていきますか？」

「授業中だったら迷惑じゃないんですか？」

「大丈夫ですよ。私はよく取材だと言って勝手に覗いてますし」

「それって色々と問題あるんじゃないんですか？」

「まあ、文さんですし」

阿求さん……。その一言で全てを解決させないでください。

とかなんとか言っておきながら結局僕たちは勝手に授業中の寺子屋に入ることになった。

「すみませーん。文々。新聞です。授業風景取材してきましたー」

と文さんが適当な事をいいつつ中に入る。

「またか……。素直に授業を聞きに来たといえいいものの……。つておや？」

慧音先生の呆れ声が聞こえる。文さんに続いて阿求さんが入る。

「おはようございます。先生」

「稗田さんじゃないですか。今日はどうして？」

「いや、皆で散歩していたついでに……」

「えっと、おはようございます」

僕も続いて挨拶をしながら入った。

「おや。君は昨日の……」

「あ、自己紹介が遅れました、鷺宮静です」

「おお、そうだった。私もしてなかったな。申し訳ない。上白沢慧音だ。以後よろしく」

僕の後には百合絵さんも続いて入る。百合絵さんは軽く会釈する程度の挨拶だった。

「ってことで、私たちは一番後ろの席で聞いてますから」と言って、文さんが先導する。

「慧音先生、本当にいいんですか？」

僕がそう聞くと、

「ああ、いつもの事だ。別に構わんよ」

と慧音先生は言ってくれた。というか、いつもの事なんだ。

「おい、真。今日は文だけじゃないから四人に茶でもいれてやれ」

「はい。わかりましたー」

慧音先生は部屋の隅にいた男の人に指示すると、教卓らしき席に座った。

指示された男の人は慧音先生に言われるとすぐに奥の部屋に入って行った。

「えーと、では。さっきの続きでー」

慧音先生の授業が再開した。

「はい。お茶です」

さっき奥に消えた男の人がお茶を出してきてくれた。まで。寺子屋って学校みたいところだろ。生徒の前でこんなこととしていいのだろうか。

「ありがとうね。真くん。あ、こちら昨日幻想郷入りした男の子。年齢的に近いかな？」

文さんが僕を紹介する。それに続いて僕も自己紹介する。

「あ、鷺宮静です。十七歳です」

「慧音先生から昨日来た事は聞いてました。俺の名前は佐崎真です。よろしくね。あと、僕の年齢はハタチだから三歳違いだね。呼び方は静くんでもいいかな？」

「大丈夫です。こちらは、真さんでいいですかね？」

「うん。大丈夫だよ。ところで、稗田さんは本日どんな用事で？」

文さんと僕が来たことよりも阿求さんのほうが気になるようだ。

「静さんが泊まる所を探していたので、私のところに泊まる事にしたのですよ。で、今日は散歩をしていたのです」

「へえ。稗田さんのところにですか」

僕たちがそんなことを話していると、文さんが突然大きな音をたててお茶を啜る。

「まあ、その辺にして、真くん。前を向きなさい」

「え？……あ」

文さんが言うように僕も前を向くと、慧音先生の顔が怒っていた。

「お客様におもてなしするのは分かるが、雑談は控えてくれるかな。

真」

「は、はいっ!!」

返事と同時に真さんはすばやく慧音先生の隣に走っていった。

「真さんって、慧音先生とはどういう関係で？」

僕は小声で文さんに聞いた。

「この卒業生で、特にやることもなかったから慧音先生のお手伝いって形で働いてる人」

「へえ。お手伝いですか」

「うん。まあ、一応あんなんでも給料貰ってるらしいからね」

「あんなんでもって……」

僕たちはそんな会話をしたりしながら慧音先生の授業を聞いたのだった。

十話

もうすぐお昼ということで、僕たちは寺子屋を後にすることにした。

「で、どうでした。幻想郷での寺子屋の授業は」

文さんは昼ご飯を屋敷で一緒にするといい、最後までついて来る事になった。

「知らない事ばかりでしたから、結構興味を持ちましたね」

「へえ、そうですか。では、今度にでもそちらの事もきかせてくださいね」

「いや、分かってますよ……」

僕と文さんがそんな話を話しているうちに屋敷についてしまった。

「阿求様。鷺宮様」

と、屋敷の門をくぐると共に女中の……なんて名前だったっけ？名前を忘れたけど女中さんが出てきた。

「なんででしょうか？」

「只今、お客様が参られております」

「あら。どちら様で？」

「八雲様の式神様でございます」

「紫様の……どんな御用で？」

「ええ、それが。鷺宮様の事で謝罪がしたいと」

「え、それって……？」

僕が驚くと、隣にいた文さんが

「たぶん、八雲紫の冬眠で静さんが元の世界に戻れなくなった事を謝罪しに来たんでしょう。彼女は律儀な式神ですから」

「式神……ですか」

今度は式神か。幻想郷は、色んなものが出てくるんだな。

初めてこの屋敷に来た時にも通された部屋で、彼女たちは待っていた。

式神と聞くから、なんか陰陽師とかが使う紙のままで来ているのかと思いきや、なんと、狐と猫の擬人化したような人がそこには座っていた。

部屋に入るや否や、その狐の擬人化は深々と頭を下げた。

「この度は、紫様の冬眠で元の世界に戻れなくなってしまい、真に申し訳ありません」

頭を下げた時に分かったのだが、この狐さん。尻尾が九本あるではないか。これはあれか。噂に聞く九尾の狐か。

その隣で狐さんのまねをして礼をする猫は尻尾が二つだった。猫又か。

ってそんなことを考えている暇じゃない。幻想郷から帰れなくなった事を謝ってもらってるのに、こんなことを考えてる場合じゃない。「いや、大丈夫ですよ。こっちの世界も結構楽しく暮らせそうですし」

と、僕は深々と礼をする狐さんに言ってあげた。

「ほお。結構住む気満々なんですね。意外と」

文さんが後ろから茶々を入れた。

「え、まあ、こんな状況だったら仕方ないかなと……」

「ま。そうですね」

と、結局文さんの結論もそうだった。意地悪で言ったのか。

「そういうことで、もう頭を上げて下さいな。御二方」

僕たちの雑談をよそに、阿求さんはそう狐さんたちに告げた。

「そ、そうですね。橙。もう戻していいわよ」

「はい。らんさま」

『ちえん』と呼ばれた猫又は、ずいぶんとかわいらしい声で狐さんに返事をして、姿勢を正した。

「それと、紹介が遅れました。私、八雲紫様の式神・八雲藍と」
狐さんに続いて猫又も喋る。

「らんさまのしきがみのちえんです。よろしくっ」
猫である。うう、なんだろう。ちょっと可愛い。

「えと、僕の名前は鷺宮静です。よろしく」

「はい。鷺宮様ですね。これからよろしくお願いします」

「よろしくっ」

軽い自己紹介が終わると、隣にいた阿求さんが、

「御二方、ついでといっては何ですが、お昼をご一緒しては行きませんか？もうこんな時間ですし」

と二人を誘った。

「ええ、そうですね。では、御言葉に甘えて」

と藍さんは答えた。

そして、その日の昼食は五人で食卓を囲んだのだった。

昼食後は、文さんが発端となり、僕の世界の話を軽く話した。阿求さんも式神二人も興味心身で聞いてくれた。

夜になると、三人は帰り、僕と阿求さんの二人で夕食をとり、その日は無事に終了したのだった。

十一話

鷺宮静。十七歳。職業、高校生。クラスではあまり目立たない方で、かと言って目立たなすぎて目立つほどの存在の薄さでもなく、まあ、とりあえずいるクラスメイトとも思われているであろう位置に存在している。一人っ子で、生活には不自由がなかった。言えば大体のものは買ってもらったし、親が言ったことを適当に守って親が薦める進路に適当に進んで、何を間違えたのかただ今幻想郷入り中。

そして何を間違えたのか、某鴉天狗が配った新聞により僕は幻想郷での有名人的存在になってしまった。外を歩けば大体の人が僕を知っている程になった。正直やめて欲しい。

だからといって、僕はずっと阿求さんの屋敷に引きこもっているわけでもなかった。阿求さんの屋敷に来てから始めた朝の散歩から慧音先生の寺子屋の授業見学がいつの間にか日課となってしまった。

その間、僕は手ぶらで幻想郷に来たからということで、生活をするための一通りのものを阿求さんに買ってもらった。着替えも和服を何着か買ってもらったので、僕は普段和服で過ごすようになった。

そんなこんなで二週間が経ち、秋の色が満載になった今日この頃、僕はあるところに行こうとしていた。

「あのー、阿求さん」

今日は休日だったので、寺子屋は休み。それ故に、僕はいつもより早く屋敷に戻っていた。屋敷に戻ると、阿求さんが生活する離れに行つて、話しかけた。

「はい。なんででしょうか？」

「すっかり忘れてたんですけど、僕霊夢さんに前お世話になったときのお礼をちゃんとしていなかったんですよ」

文さんにはちよくちよく遭遇したりするので、そのときにお礼はしたのだが、霊夢さんとは初めて会ったとき以来まったく出会っていない。

「あら。そうでしたの？」

「はい。で、これから神社まで行きたいと思うのですが……、道中が……」

「あの林道ですね。あそこは今、普通の人が通れるような場所じゃないと思いますが……」

林道……。獣道ですけどね。すでにあれはどう見ても。

「そうなんですよだから、僕一人では行けないわけなんですよね」「私もそう思いますわ」

「だから、どうやったら行けるかな……？と、相談しにきたんですけど……」

「そうですね……。慧音先生も満月の夜以外は普通の人間ですし……」

「はい。かと言って、自警団も確かお金がかかりますよね」

「まあ、自警団の依頼金はウチで出せないわけではないのですが……、そうだ」

阿求さんはぽんと手を打った。

「文さんと呼んだらどうです？ 静さんもそちらの方が楽でしょうし」

「文さんと呼ぶって……、どうすれば？」

「この屋敷に初めて来た時に、貰っていたじゃないですか。文さんの鈴」

文さんの鈴……。あれか。確かに貰った。どこに置いたっけな？「あ、それがありましたね。僕、ちょっと探してきます」

そういつて、僕は自分が使わせてもらってる部屋に行き、鈴を探してきた。

「何かあると困るので、そこの庭で鳴らしてみてください。ほら、

猫ちゃんたち、こっちのお上がり」

そういつて阿求さんは庭にいる猫達を呼んだ。何故かは知らないが阿求さんの屋敷には野良なのか、飼いなのか、どちらか分からないがとりあえずたくさんの猫がいる。

「じゃあ、いきますね」

なぜか意気込んでみる。

「文さん」

と、呼びながら鈴を鳴らしてみた。

すると、どこからか風を切るような音がし、突然屋敷の庭に突風が訪れた。

「うわっ」

「きゃっ」

思わず、僕達は目をつぶった。

「あやややや。少し風が強かったですかね？」

と、聴き慣れた声がした。

その声の主を確認するために、目を開けてみるとそこには、

「こんにちは。阿求さん。静さん。今日はどんな用件で？」

文さんが、そこにいた。

「文さん……、もうちょっと登場の仕方、何とかならないんですか……？」

「いやいや、ちょっと急いできたのでそこは勘弁してくださいな。

で、今日は何でしょう？ 静さんのほうから呼んでくれるなんて珍しいですね」

「あ、はい。今日は、僕を博麗神社に連れて行って欲しくって……」

「博麗神社ですか？ いまどき珍しいですね。里の人で神社に行こうと思うなんて静さんくらいですよ」

文さんはおどけて答えた。

「文さん、それは言いすぎですよ。私だって、たまに神社には行きますよ。主に魔理沙さんが引っ張っていくケースが多いですが」

「ははは。ありえますね。で、博麗神社にどんな御用で？」

「先日のお礼を、まだちゃんと言ってなかったの。文さんにはこの前言いましたけど」

「ほう。そうですか……。よし、じゃあお供しましょう。阿求さんもうですか？」

文さんがそう誘うと、阿求さんは少し残念そうな顔をして、

「いえ、私は今日中にやらないといけないことがありますので……」

といった。

「ああ、それは残念です。では、静さん、早速行きますか。空路が良いですか？陸路が良いですか？」

「いや、普通に陸路でいいです……」

十二話

すっかり紅葉の森となった阿求さん曰く林道という獣道を、僕は同行を断った彼女のせめてもの気持ちとして持たせてくれた菓子折を持って文さんと二人で歩いていた。

「で、どうです？ 幻想郷には慣れましたか？」

「ええ、みんな優しい人ばかりで。雰囲気が一昔前の僕の世界に似てるので、なんか歴史の教科書の中に入ったみたいで楽しいです」

「主にそちの世界にあったものがこっちに流れてますからねえ。」

まあ、なによりここに慣れてきているようで安心ですね。その和服も結構お似合いですよ。阿求さんが買ってくれたんですか？」

「はい。そうです」

「うーん。貢がれてますねえ」

文さんはしみじみと言う。

「ところで、阿求さんからお小遣いとかも貰ってたりしますか？」
突然文さんはそんなことを聞いてくる。

「さすがに貰ってないですよ……」

「おや、そうですか。では未だに無一文なんですね」

「まあ、そうなりますね」

「うーん。前回お金がなかったからお賽銭入れられなくても許してくれてたでしょうが、今日は大丈夫でしょうかね？」

「え、何がですか？」

「博麗神社です」

「ああ、そういえば。前回入れなかったですね」

「あそこは静さんもわかるとおり、交通手段がこの道くらいですから参拝客が少ないのですよ」

確かにこの道は僕一人では行けるはずがない。

「自警団に頼むこともできますが、自警団にお金を払ってまで行くところでもないでしょうし」

「まあ、そうですよね」

僕がそう相槌を打つと同じタイミングで

「うえーん」

という少女の声が聞こえた。

「おや？聞いたことがある声ですね」

僕は聞き覚えがなかった。

「うえーん。みのりちゃんどこー？」

同じ声がどこからともなく聞こえた。

「稔子さんをお探しですか……。ということは静葉さんですね。しずはさーん。どこですかー？」

「ふえ？そのこえって……」

と、そんな声の後に茂みの中から紅葉のかたまりが飛び出してきた。

「あー、てんぐのあやちゃんだー」

よく見ると、それは紅葉柄なのか、それとも紅葉そのものでできてるのかよくわからない服を着た女の子だった。

「静葉さん、また迷子になっちゃったんですか？」

「あやちゃん『また』なんてひどいよー。きょうはみのりちゃんがまいごになったんだよー」

「はいはい。わかりましたよ。ところで今日はなぜこんなところにいるんでしょうか？収穫祭はもう終わったはずですが」

「あ、そうそう。きょうはみのりちゃんとせんじつのおわびってことでみこさんのところにいくのー」

「先日のお詫び……。ああ、妖怪の山での出来事ですネ。それなら私たちと一緒に行きませんか？私たちも博麗神社に用があるんですよ。一緒に行けば迷子にならずに神社に行けるでしょうし。まあ、稔子さんも一緒にいながら迷子になったんでしょうけどね……」

「話から聞く限り、そうですよね」

「わーい！ありがとー、あやちゃーん！——ところで、そっちのひとはどなたさん？」

文さんに静葉と呼ばれている女の子は僕を見て聞いた。気づいてなかったのか。

「ああ、紹介が遅れましたね、こちらは先日幻想入りしてしまった鷺宮静さんです」

「あー、あやちゃんのしんぶんにつてたひとだねー。しってるよー」

「で、こちら紹介が遅れました。こちら、紅葉の神の秋静葉さんです」

「神様だったんですか？」

「こんな女の子が神様なんて驚きだ。」

「そうですね。八百万の神の一人になりますね」

「そうなんですか。今後ともよろしくおねがいします」
神様と聞いて、妙な挨拶になってしまった。

「うん。よろしくー」

「じゃ、自己紹介もすんだことですし、神社に向かいますか」

「よーし、いこー」

「はい。そうしましょう」

十三話

「静葉ちゃん！もう、どこに行ってたのよ！」

博麗神社に着くと、見た目が静葉さんとほとんど同じ女の子が駆け寄ってきた。

「どうやら、静葉さんと同行していた人らしい。いや、人はおかしいか。神様なんだし。」

「ああ、天狗の文さんじゃないですか。いつもありがとうございます」

「いえいえ、私たちも神社には用がありましたので」

「用？天狗のアンタがこんな所に用なんて、何かあるわね」と、突然境内の奥から声がした。

いつかの巫女であった。

「あら？今日は静もいるのね。本当に何か用でもあるの？」

霊夢さんはこちらに近づきながらそういった。

「おい、それは言いすぎだぜ」

霊夢さんの後ろから声がした。

賽銭箱の上に胡坐をかいて座っている白黒魔女。魔理沙だ。

「こんにちは、霊夢さん。魔理沙」

やはり魔理沙だけさん付けしないのは微妙に違和感がある。

「よう。久しぶりだな」

「そうね、里に案内して以来ね」

と僕たちが挨拶を終えた辺りで、神社に着いたときに駆け寄ってきた少女が、

「ところで、そちらの方はもしかして文さんの新聞に載っていた最近幻想郷入りしたという……」

と聞いてきた。

「あ、はい。鷺宮静です」

「やっぱり。私は迷子の静葉ちゃんの妹の秋稔子といいます。よろ

しく願います」

「え？ 静葉さんの妹なんですか？」

「はい……。よく言われます……」

稔子さんは残念そうにそう呟いた。

「というか、今日は客人が多いな。五人も神社が客に来るなんてめずらしいぜ」

「あら？ 五人の客人って、そこにいる四人以外に誰がいるのかしら」

「失敬な。私は立派な客人だぜ」

「ま、そんなことはどうでもいいとして、その四人はどんな用事で来たの？」

霊夢さんが魔理沙との話を切って、僕たちに振ってきた。

「ええ、それなんですが、私と静葉ちゃんは先日のお詫びということで、おすそ分けをしにきたんです」

そういつて、稔子さんはたくさんのお菓子がはいったバスケットを取り出した。

「おお、うまそうだぜ。では、おひとつ……イテっ」

稔子さんが差し出したバスケットに手をかけようとした魔理沙の手は、霊夢さんに思い切り叩かれた。

「待ちなさい。それは神社に持ってきてくれたものよ。ちゃんとお供えないと」

「うう……。だからって殴ることはないだろう」

「わたしももってきたのよー」

と静葉さんが後に続いて取り出したものは、

「え？ なにこれ？」

長方形の箱だった。

それはまるでお菓子の詰め合わせの箱のような形をしていた。そしてその箱に対して最初に反応したのは妹の稔子だった。

「これ？ これはねー」

静葉さんが箱の上蓋をあけると、そこには綺麗に並んだ――

「もみじまんじゅうよ」

——があった。

「え？ まって静葉ちゃん。なんでそんなもの持ってきてるの？ 確かに秋っぽいけどそのチョイスはおかしいよ！」

なんだか、稔子さんがかわいそうに思えてきた。迷子になるわちよつとずれたものを持つてくるわで。

「まあ、まんじゅうなら果物より日持ちするからいいんじゃない。

正直なところ食べ物なら何でもいい気がするし」

「正直なところそうだよな」

「そ、そうですか」

霊夢さんがかなり色々な意味でぶっちゃけた。

「それじゃあ、残りの二人の用事は何？」

「私の用事は静さんの護衛です。実際に用があるのは静さんですの
で。静さん、どうぞ」

「あ、はい。えっと、まだ里に送ってくれた時のお礼をちゃんとしていなかったなので、それを言いに来たんです。あ、あと、阿求さんからの手土産もどうぞ……」

と、ずっと持っていた菓子折りを渡そうとすると、霊夢さんが僕に尋ねた。

「それは、阿求が買ったの？」

「え。はい。そうです。まあ、買ったというか、渡してもらったというか……」

「その服も、阿求が買ったの？」

「え。はい。そうですか……？」

「静。アンタちょっとそこに座りなさい」
突然石畳を指差してそういった。

霊夢さんの、お説教タイムが始まった。

十四話

「あんた、なんでこの幻想郷にきたか考えたことある？」
「え？」

僕の前に座った霊夢さんは突然質問してきた。
その質問に、僕は戸惑った。

——僕が幻想郷に来た意味？

「あんたが今までどんな生き方をしてきたかは知らないけど、ここ
で暮らすといった以上、このスタイルには合わせてもらおうわよ。
まあ、そんなことどこでも当たり前だとは思うけどね」

「……郷に入れば、郷に従えってことですか？」

「そういうこと。わかってるじゃない」

霊夢さんは改めて僕の前に座る。

「あんた、いつまで阿求の世話になるつもり？」

「え？」

「え？ じゃないわよ。いつまで世話焼かせるんだって、そう聞いて
るのよ」

「えっと……一応、外の世界に帰れるまで」

「それはそれまで住居を借りるっていう話でしょ」

「はい、そうですね」

「そういうことじゃなくて、たとえば食事とか。阿求の屋敷の人が
作ってくれてるのをただ毎日食べてるんでしょ？」

「はい」

「で、あと着替えもないからその和服も買ってもらってる」

「そうです」

「今すぐ阿求の屋敷から出なさい」

「ええ！！！」

今日一番驚いた。なんで？ 何で何だ？

「どうしてですか？ 阿求さんの屋敷を薦めてくれたのは霊夢さんた

ちじゃないですか!」

「あんたまだわかんないの? さっき言ったでしょ。『郷に入れば郷に従え』。この言葉知らない? 『働かざるもの食うべからず』」

「あ……」

「わかった? だからいつてるの。いつまでも阿求に甘えた生活じゃなくて、あんたも働いて、帰れるようになるまであそこにもいかしくない生活をとるべきよ。あんた、年いくつだっけ?」

「十七ですけど……」

「阿求はね、十四だけどあれでも働いてるのよ。いつもただ離れで暮らしてるわけじゃないの」

「あ……そういえば……」

「——『今日中に終わらせないといけない仕事がありますので』——私だって働いてるのよ。こう見えて」

「本当かよ」

そこで魔理沙がつっこんだ。

「あんたこそ見えないわよ」

と霊夢さんは魔理沙に突っ込み返し、僕のほうを向き直った。

「私も魔理沙だって働いてる。慧音も、文だって働いてる。……この二人は神様だから関係ないわね」

「うわー、ひどいですよー」

「そうですよー」

神様二人が反論した。

「じゃあ、働いてるの?」

「衣食住とか、八百万の神に関係ないですからー」

「さーて、ようじもすんだから、かえろーみのりちゃん」

神様二人は霊夢さんの質問を聞いたとたんどこか遠くのほうを見ながら返答した。

「霊夢、あんなやつらと会話すること自体が間違ってるぜ」

「まあ、とにかくそういうこと」

霊夢さんは話を戻した。

「働く気がないのなら、あんたに阿求の屋敷にいる事は許されないわ」

「え、でも、急にそんなこと言われても……」

「別に特別なことを要求しているわけじゃないのよ。あんたには私たちが知らないことを知ってるでしょう。それを活かせる場所を、貴方は知っているはずよ」

「僕しか知らないこと？あ——」

僕の世界のこと——。

慧音先生や、阿求さんや、文さんが聞きたがっていた外の世界の話——。

「それに気づけたら、一步前進ね」

そういつて、霊夢さんは立ち上がる。

「ありがとうございます。霊夢さん」

「なに。私は当たり前のことをしたまですよ。さ、みんなあがりなさいな。お茶でも飲んでいきなさいよ。お茶菓子も届いたことだし」

「あ、はい」

「ではお言葉に甘えて」

「「はい」」

結局、夕方まで僕たちは神社にいた。霊夢さんと魔理沙に、幻想郷で起こったいろんな異変という名の事件を聞かせてもらった。僕がいた世界では考えられないような出来事ばかりで楽しかった。その話の間、文さんはずっと手帖にメモを取り続けていた。新聞にでも載せるのだろうか。

「今日は、勘弁してあげるわよ」

見送りに出てきた霊夢さんが突然僕に向かってそういった。

「え？」

「お賽銭よ。さっきの話だと、まだお金持っていないんですよ」

「そうですね。さすがに阿求さんからおこずかいまではいただけませんから」

「じゃ、今日は見逃してあげる。ただ、次きた時は入れてもらおうからね」

「はい。そうします」

「次くるときにお金を持っていればいいと思うがな」
魔理沙が茶々を入れる。

「あ、あと、コレ」

そういつて、霊夢さんは何かを取り出した。

「あんたがこっちの世界に来たときに倒れてたって場所にこんなものが落ちてたの」

そういつて渡されたのは僕の携帯電話だった。

「あんたのだろうと思って取っておいてたんだけど、どう？」

「これ僕のです。ありがとうございます」

「ああ、そう。よかった」

渡された携帯を早速開いてみる。予想はしていたけど、圏外だった。

「お？それが外の世界の連絡手段といわれる携帯電話というものですか？」

文さんが横から覗いてきた。

「はい。そうです。でも、この世界じゃ使えないみたいですね。使えるエリア内に入っていないみたいですよ」

「博麗大結界の中だからでしょうか？」

「たぶんそうですね」

そうして、僕は携帯をポケットに押し込んだ。

「じゃあ、皆さん帰りますか」

文さんが号令をかけた。

「そうですね」

「さーかえろー」

「静葉ちゃん、今度は迷子にならないでよ」

「わかってるよー」

みんなそれぞれ返事をしながら、境内を出ようとしたとき、

「あ、あんたは駄目よ。残りなさい」

霊夢さんの声だった。みんなが霊夢さんと、隣にいる魔理沙が立つてるほうを向いた。

「文よ、文。あんたは、賽銭入れるお金あるでしょ」

霊夢さんの台詞に文さんは苦笑する。

「いやあ、そこらへんは見逃してくれるのかと思いましたよ」といって、文さんは霊夢さんたちのほうに歩き出した。

「ああ、静さんたちは先に帰っていいですよ。秋姉妹が付いてるから、獣道は通れるでしょうし」

「え、だって、賽銭入れるだけですよね？」

「まあ、そうですね。ちょっと、先に行ってくださいますか？」

「あ、はい。わかりました。じゃあ、行きましょう」

「はい」

「それでは、また今度」

そういつて、僕たちは神社を後にした。

「まったく、慧音が自分から言えぱいいものを」

「それじゃあ静は自分から仕事と認識してやろうとしないぜ。だからこそその話だったんだろ？」

「そうですね。だからこそ私も慧音先生の話に乗り、貴方たちも乗ったということですよね？」

「まあ、そういうことだけだね。まったく面倒だわ。外の世界の話なんて、私は興味がないわ」

「私は興味がありますね」

「そりゃブン屋だからな。私も興味があるな。魔女として、飽くなき探究心が私を呼んでる気がするぜ」

「じゃあ里に行きなさいよ」

「それは、勘弁してほしいな。慧音の寺子屋にはあいつが来ることが多い」

「そりゃ残念ね」

「で、文。そこでひとつお願いなんだけど」

「なんでしよう？」

「今までこれと言って言っていなかったけど、あんた、静が無事に幻想郷で暮らせるように守ってあげてね。私は異変のためにここで待機しなきゃいけないし、魔理沙はいつもどっか色んなところに行っちゃうし、阿求は人間だし、慧音は満月の夜以外はただの人間だし」
「いつでも駆けつけることのできる私に頼みたいと。そういうことです」

「そうよ。あんたなら、今回の時みたいすぐに駆けつけることができるんでしょ？」

「そうですね」

「じゃあ、お願い。静は、幻想郷のお客様なんだから――」

第二章・幻想郷の日常 完

「きゃー！ー！ー！妖怪だあ！ー！ー！ー！ー！ー！こわいよ！ー！ー！ー！ー！ー！」

「ちよっ、静葉ちゃん逃げないで！！また迷子になっちゃうー！ー！」

「って、待って！！僕を置いてかないでえー！ー！ー！」

とかなんとかありました、僕たちは無事、里に帰ることができました。

第三章 山の神様くれた風 十五話

「これは、携帯電話といって、こっちの世界で言う式紙みたいなもの……なのかな？とりあえず、同じこれをもってる人と会話したり、手紙を受け渡ししたり、計算もしてくれたりするんだ」

僕は寺子屋の一番最前列、教卓に座ってみんなに自分の携帯電話を見せながら教える。

「ほお。それから何かに具現化しなくても、それらの能力を発揮することができるのか」

慧音先生が僕に質問する。慧音先生は今、生徒側の机に座っている。先生も、知らない知識を教わるときは生徒になるのだ。

「そうですね。まあ、これは藍さんや橙ちゃんみたいに自立行動しないので、こちらから指示しないと動いてくれませんけど」

僕は今、慧音先生の寺子屋で臨時講師をしている。

事は先日、霊夢さんの説教を受けた夕方、里に帰ってからのことである。

霊夢さんの説教により、自分に今できることを考え、自分ができる仕事を考えた末に思いついたのが、慧音先生の寺子屋で外の世界の話をする事だった。

それを、里に戻ってすぐに慧音先生に提案したら、すんなりと許可してくれた。まるで前から予定されていたかのように。

よく考えてみたら、霊夢さんの説教も寺子屋で外の世界の話をしろといってるような話しぶりだったし、実は二人ともグルだったんじゃないかとも思ったりしたが、気にしないことにした。

誰がなんと言おうと、ここで働くということは、最終的に自分で決めたことなのだから。

僕の授業は週二回行われる。決まった曜日で一時間の講義。それは先生がまだ僕が教えることには慣れてないだろうと思い、僕に講義の準備としての時間を多くくれているのだ。

授業を始めてからすでに二週間。あれほど紅く染まっていた木々のほとんどが、地面に紅葉の絨毯を敷き始めたころ。僕の授業の話が里中にまわり、今では僕の授業の日に外の世界に興味を持った人が、寺子屋にくるようになった。もちろん、文さんや阿求さんも例外ではなかった。

文さんは、僕が講義をしている写真を撮り、新聞にその日話した事と一緒に載せたり、阿求さんは僕が屋敷に帰ると、その日の講義の感想を聞いてきたり、書物に書き記したりする。

そして、何よりも僕が外の世界の話をするのを待ち望んでたかのようにしているのは、慧音先生だった。

「もうひとつ、質問していいか？」

「为什么呢？先生」

「今の話を聞くと、その携帯電話というものは、それ単体では動かせないということか？相手がいないと会話や手紙を送ったりすることができないのか？」

先生は、僕が外の世界の話をし始めると、目を輝かせるのである。僕の講義で質問してくる人は大体が先生なのである。

「会話や手紙を送ったりすることはもう一つ携帯がないと出来ませんが、計算だったり、アラーム機能だったりこれは単体でも出来ますね」

「ほお、そうなのか」

そのやり取りを聞いた真さんが発言する。

「確か、山に来たばかりの巫女がそれと同じものを持ってるって話を聞いたな」

「山に来たばかりの巫女？」

僕が聞き返す。

「ああ、最近妖怪の山に神社ごと幻想入りした神様と巫女がいてな。その巫女がそれらしき物を持ってるという話を聞いたんだが。鴉天狗さん、どうでしょう？」

真さんは部屋の後ろのほうにいる文さんに話題を振った。

「え？あやや。た、確かに持つてるところを私は何度か目撃したことはありますね。それとは出来ないんですか？」

質問の輪は僕に返ってきた。

「出来ないことは無いでしょうけど……。ここ圏外……。いや、会話や手紙を送るためのエリア外なので、出来ないですね……。その携帯のアドレスも知りませんし」

僕がそういうと、今度は阿求さんが発言する。しかしそれは僕に向けたものではなく、文さんに向けたものだった。

「山の河童さんなら、なにか出来ないでしょうか？」

「にとりですか。たぶん頼めば何とかしてくれるでしょう」

「そうですか。そのようですよ、静さん」

と、なにやら阿求さんと文さんの二人で何かが決まったようだ。

「え？どういことですか？」

「その、携帯電話を使えるように出来るかも知れないということで
す」

十六話

「――で、ここからは私に従って、ついてきて下さい」

と、文さんが仁王立ちで僕ら三人の前に立つ。

ここは、妖怪の山。本来人間が立ち入ってはいけない山だそうだ。あの講義のすぐ後、文さんが山に交渉してくれたおかげで、僕らは講義の翌日には文さんについていく形で入らせてもらうことになった。

僕はこの携帯の所持者として。阿求さんは立会人として。実は立会人は慧音先生が一番立会人として参加したかったらしいが、さすがに寺子屋でモノを教えている二人が出て行くと今日の授業ができないので、見たものの全てを記憶することが出来る能力を持った阿求さんが代わりになることになった。

そして、三人目とは――

「じゃあ、阿求。落ちないようにしっかりと掴まってるんだぜ」

文さんが山に交渉しに行ってから戻ってくるまでにいつの間にか増えていた魔女がいた。

――魔理沙である。

魔理沙のちゃっかりさにはもう文さんもほとほと呆れ返っていたらしく、体の弱い阿求さんを箒に乗せて低空飛行でゆっくり飛ぶという条件をつけて、仕方なく魔理沙も連れて行くことになった。

「携帯を調べてくれるにとりには話をつけているので、とりあえずにとりのところに行きましょう。その後、もう一つの携帯の持ち主である早苗さんの神社に向かいます」

「おう、わかったぜ」

「了解です」

「はい。大丈夫です」

昨日阿求さんが提案した方法とはこうだ。幻想郷一の技術者である山の河童に携帯を調べてもらい、それをどうにかして山の巫女さ

んの持っている携帯と通信できるようにしてもらおうという事である。そのために、僕たちは山登りを開始したのである。

「うーん。そういえば、人が登ることを想定してませんからねえ。この山」

あまりにも人が通るべき場所ではない森のような坂道を僕は歩く。さすがにこんな山道は辛い。僕は行き絶え絶えに山登りを続ける。その周りを文さんと魔理沙が低空飛行で飛ぶ。

「やっぱり私の背中か、魔理沙さんの箒に乗ります？」
文さんが心配そうにこっちを見る。

「ハア……ハア……、いや、確かに乗った方が早い気がするんですけど……」

僕は口ごもる。文さんの背中に乗るとか、魔理沙の箒に乗って落ちないように阿求さんか魔理沙に掴まるとか、それ以前に女性の手すら握ったことのない僕にそんな提案をするなんて。まあ、それ以外にあんまり方法なんてないんだが。

「けど？ けどなんだ？」

箒に乗った魔女がこっちを向く。魔理沙さん、よそ見しないで。安全運転してくださいよ。

「いやあ……、なんというか。まあ、み、皆さんは特に考えたことないんですか？」

「なにがですか？」

阿求さんもこちらを見る。

「うーん、えっとですね……」

なんだこれは。微妙に公開処刑じゃないか。

「厄い。厄いわ」

どこからか声が聞こえてきた。ふと正面を見ると、遠くでなにやら黒い渦が渦巻いていた。

「おや、その声は雛さんじゃないですか。お久しぶりです」

「ん？ 雛ってあれか？ あのえんがちな奴か？」

と、文さんと魔理沙が黒い渦に向かって話しかける。知り合いなのか。

「あら、そちらは鴉天狗の文ちゃんじゃないのお。で、貴女も相変わらずなのね。こんなところでどうしたのお？」

すると、黒い渦の奥から人形のような格好をした女性がバレエやフィギュアスケートの選手みたいにクルクル回りながら現れた。

「え？なんなんですか？あの人」

その登場の仕方があまりにも変だったので、僕は思わず文さんに聞いた。

「彼女は厄神様の鍵山雛さんです。趣味は厄集め……というかそれが仕事ですね」

「ひどいわぁ文ちゃん。そんな言い方」

厄神様と紹介された女性は回転を止め、僕らに向き合う。はつきりと顔が見えたが、外見と同じように人形のような顔だった。だが、少し不機嫌そうな顔だ。

「ところで、今一番厄いこの男の子はだあれ？」

「えっ？厄い？」

雛さんは僕をなめるように見回しながら文さんに聞く。

「ああ、彼は最近幻想入りしてしまった鷺宮静という人でしてね。厄いって彼のことだったんですね」

「あのー、厄いってなんですか？」

「アイツにとっては変なことは全部厄なんだろう」

「魔理沙さん、説明になってませんよ」

僕の問いに対して箒の上の二人がコントを始める。そして何も分らないという。

「まあ、雛さんの厄いというのは厄そのものだったり、人の煩惱だったり、さまざまな意味が込められてるんですよ。なんなら、静さんの厄も取ってもらったらどうです？」

「そうねえ、外から来た人の厄なんて貰った事ないからねえ。ほし
いわぁ」

「まあ、自分で持っても良い事じゃなさそうですし、貰ってくれるなら……」

といって、僕はなんだかわからないうちに厄をあげることになっていた。

「この先には歩きでは行けない様な崖があるから、静ちゃんは誰かに運んでもらった方が早いかもよ。それじゃあみんな、またこんどねえ」

なんだかわからないけど厄をとられたっぽい僕と三人は雛さんに見送られながら山登りの続きを始めた。

「では静さん、どうします？」

意外と早く雛さんが言っていた崖にたどり着いてしまった。
と、そこで僕は自分でも驚く声を発していた。

「じゃあ、文さんの背中に乗ります。魔理沙の箒は阿求さんも乗っていることだし。そのまま河童さんのところまで飛んでいきましょうか」

「あややや？さっきまではあれだけためらってたのにいいんですか？」

「はい。大丈夫です」

自分でもすんなり乗ることにしたことに驚いたが、考えてもどうにもならない気がしてきた。

「なんだあ？もしかして雛が持ってた厄ってこれのことだったんじゃないか？」

「そうかもしれないですね？」

と、後ろで話してる二人のことも気にしないことにした。

十七話

「あそこです。あそこがにとりの工房です」

僕をおんぶしている文さんがいくつもある滝の一つを指差すと、並走する魔理沙に声をかける。魔理沙は大声で了解というと、後ろに座っている阿求さんに声をかけてからジェットコースターのくだりのように、指定された滝に降下していった。その際、阿求さんの叫ぶ声が聞こえたが、ご愁傷様としか言いようがない。意外とかわいい声だったな。

「あやややや。阿求さんが乗ってるからゆっくり飛行すると言ったはずなのに、もう痺れを切らしたんですか。全く」

と、文さんが呟く。阿求さん大丈夫かな。

「ま、私たちはゆっくり行きますか。私は幻想郷最速とはいえ、今は貴方に乗せているので魔理沙さんのような行為はしませんよ」

「はあ、よかったです」

あんなに渋ってはいたものの、意外と乗ってしまえば簡単なものであった。

大空を移動するのは気持ちいいものでもあり、なかなか捨てたものじゃなかった。そんなことをいつもできるみんなが僕は少し羨ましいとは思ったが、魔理沙みたいな行為は少々いただけないと思う。

文さんは、水しぶきが顔にかかるくらい滝に近づいてからゆっくりと降下していった。

「はっはっは。幻想郷最速の癖に遅いな。今回は私の勝ちのようだね」

滝の裏側の洞窟で魔理沙たちと合流したとき、魔理沙が勝ち誇ったように言った。洞窟の壁で、阿求さんがぐったりとした顔でうずくまっていた。

「いつ私たちは勝負を始めたんですか。貴女は阿求さんを乗せているからゆっくり飛行しなさいと言ったでしょうが。全く」

文さんと魔理沙が言い合いをしているうちに、僕は阿求さんの元に駆け寄って、阿求さんの心配をした。

「いえ……、大丈夫です……。魔理沙さんの箒にはたまに乗らせていただくのですが、ごくまれにあのような速さを出すときがあるので、一応慣れては……います……」

とは言ってはいるものの、阿求さんの顔はかなりの蒼白である。それに語尾に近づくほど声が小さくなっている。

「少し休憩すれば、大丈夫ですので……。ふう……」

と、阿求さんが言うので、僕たちは数分阿求さんの復活を待ってから、洞窟の奥へと進んだ。

滝の裏にあった洞窟の奥に進むと、少しひらけた場所に出た。そこにはいろいろな工具が散乱していて、その中央あたりになにやら背をむけて作業をしている人影があった。

「にとり、つきましたよー」

「邪魔するぜ」

「いやー、待ってたよ。すぐそこまで来てたのはわかってたんだけど、丁度手が離せなくてね。おや、その声はいつぞやの魔女かね」

といいつつ、後姿から全くもって河童の様には全くみえない河童だと思われる人(?)が、背を向けた状態でなぜかアース溶接をしながら僕らに話しかけてきた。でもたぶん、僕らに話かけてきたということはこの人(?)が河童なんだろう。

河童は作業をいったん止め、こちらに向き直りながら自己紹介をした。

「やあやあ。私は河童の河城にとり。九代目も幻想入りした人も、今後ともよろしくねえ」

にとりと名乗った河童は、水色の服に緑の帽子。そして甲羅のように大きな緑色のリュックを背負っていた。僕が想像していた河童

とはえらくかけ離れた人物だった。

「こんにちは、河城にとりさん。こちらこそ、今後ともよろしくお願ひします」

「あ、よろしくおねがひします」

阿求さんが丁寧な挨拶をしたのにつられるように、僕も挨拶をした。

「いやあ、そんなにかしこまらなくてもいいよー。ところで文、お客さんはこの二人じゃなかったのかい？」

「まあ、私もそのつもりだったんですけどね……」

「まあいいか。で、ケイタイデンワとか言うものだっけね？ちよつと見せてくれよ。あ、みんなそこらへんある椅子に勝手に座っているよ」

「あ、はい。これです」

にとりさんが早速本題に入ったので、僕は慌ててポケットから携帯電話を取り出して、にとりさんに渡した。僕らは個々で工房内の椅子を取って座った。

「ほお、こんなに小さいのに八雲家の式紙と同じ力を持つなんてねえ。外の世界の時代も進歩したねえ」

「これこそ猫イラズだな」

横から茶々を入れる魔理沙を無視してにとりさんは僕の携帯をいろんな角度から眺め、そしていじる。

「ところで、これ、どうやって使うんだい？」

「あ、これはですね……」

「といって、僕は携帯を開く。」

「おおー、なんかスイッチがたくさんが現れたねえ」

「このスイッチが、個々の機能に対応してまして……」

カチカチ操作しながら僕はにとりさんに主に使用する機能を説明する。

「ほお、やっぱり外の世界の技術はすごいな。これ、別に妖怪が作ってるわけじゃないんだろ？」

「外の世界に妖怪はいませんよ」

魔理沙の問いを、僕が答える前に阿求さんが答えてしまう。

「うん。やはり人間の技術はすごいよな」

「とかいっておきながら、私の作品をちよくちよく盗みに来るのはやめてくれないかねえ」

にとりさんは僕の携帯操作を眺めながら言う。

「いやだって、幻想郷での技術者といえはお前らだろ？それに盗んでいるんじゃない。死ぬまで借りてるんだ」

「同じだと思いますけどねえ。どうです？阿求さん」

「同意見ですね」

魔理沙の評判の悪さは酷いものだった。前々から軽く耳に入っていたことはあるが、ここまで酷いものだとは思わなかった。

「まあ大体の動きはわかったよ。これを守矢神社の巫女のケイタイデンワと会話や文書を受け渡しできるようにすればいいんだねえ」

「そうですね。受け渡しの原理とか、僕は知らないことが多いんですけど、大丈夫ですか？」

「うーん、やってみないことにはわからないからねえ。とりあえず、守矢神社に行ってみようか」

「では、また山登りをしますか」

にとりさんの提案に、文さんが椅子から立ち上がりながら言った。

十八話

「あら、文さんににとりさん。今日はどうしたんですか？」

僕は文さんの背中に、阿求さんは魔理沙の箒の上にそれぞれ乗せてもらい、にとりさんは自力で、山の上にある神社まで飛んできた。

神社に着くと、境内に霊夢さんとはまた違った青と白の和服を着た巫女さんが掃除をしていた。

「おや？魔理沙さんの箒に乗ってる方と文さんの背中の方は見慣れない方ですね。どちらさまでしょうか」

「こちらは、先日幻想入りしてしまった鷺宮静さんです」

地面にゆっくりと着陸した文さんは僕を紹介した。

「ああ、先日の文さんの新聞に載ってた方ですね」

「こっちは人間の里に住んでる稗田阿求だぜ」

と、阿求さんの方は魔理沙が箒から降ろしながら紹介した。

「初めまして。鷺宮静です」

「初めまして。稗田阿求と申します。今後ともよろしく願いします」

文さんの背中から降りた僕は阿求さんと一緒に巫女さんに挨拶をした。

「こちらこそ初めまして。私は風祝の東風谷早苗と申します」

と、東風谷早苗と名乗った巫女さんは深々とお辞儀をする。

「かぜはふり？」

「まあ、巫女のようなものだと思いますよ」
珍しく文さんが詳しい説明を入れてくれなかった。

「ところで、皆さんお揃いで何の御用でしょうか？八坂様はまだ寝てますし、守矢様は今外出中ですが」

「いやいや、今日は早苗のほうに用があってきたんだがねえ……」
と、そこでにとりさんが切り出す。というかにとりさんのほうに

は話してあったのにこっちの早苗さんのほうにはなんの連絡もしてなかったのか。

「え？ 私、ですか……？」

「……そう、ですか。わかりました」

座敷に通された僕たちは早苗さんに事情を話した。ちなみに、早苗さんにまで話がいつてなかったのは、昨日から今日までの間に文さんが僕たちを山に入れる許可を取るために時間を使って、早苗さんに報告するのを忘れていたかららしい。

「で、協力していただけませんか？」

文さんが尋ねる。

「この幻想郷でも、携帯電話が使えるようになるんですよね？ 静さんのとしかできないという限定条件ですけど」

「ん、いやまだできると確定はしていないけれどねえ。私は全力を尽くすよ」

早苗さんの質問に、にとりさんは答える。

「里のみんなも、期待しているわけですよね？」

「はい。それに、もしそれが成功したならば、里のみんなと今よりもっと親しくなれると思います。私はもっと早苗さんとお話がしてみたいです」

阿求さんもそれに答える。

「わかりました。少々お待ちください」

といって、早苗さんは立ち上がり、部屋から出て行った。さほど時間を空けずに、早苗さんが部屋に戻ってきた。

「こちらが、私の携帯です」

と、早苗さんが僕達の前に座りなおすと、手の中にあったものをにとりさんに差し出した。

「河城さんの技術力は、十分承知しておりますので私は河城さんを信じてこの携帯を託します」

そこには、淡い緑色の携帯があった。

「ですので――」

早苗さんはそこで言葉を区切り、

「――絶対に壊したりしないでくださいね。一応SDカードにはお友達とのメールや写真とか全部移し替えましたけど、それでもその携帯が使えないとなんにも見れなくなっちゃうんで、雪音ちゃんとか貴子ちゃんとかのメールを読み返すことが出来なくなるとわたしはけっこうつらいんでぜったいにせいこうさせてくださいおねがいします!!!!!!」

と、一気ににとりさんに喋った。

「あ、ああ、うん。分かった。絶対成功させるよ……」

にとりさんを始め、ここにいた全員が早苗さんに圧倒されていた。

十九話

「では、私は研究を始めるので、これにて失礼するよ。完成したら文に伝言を頼むので、その時は私の工房に来て欲しいねえ」

と言に残して、にとりさんは僕と早苗さんの携帯を持って自身の工房へと先に帰ってしまった。

「ところで、早苗さんも静さんも、幻想郷に来る前はコウコウセイという職業だったらしいですね」

にとりさんが出て行き、一息ついたところで阿求さんが尋ねた。

「あら、静さんも高校生だったんですか？ 私はてっきり大学生の方かと……」

「いやいや、さすがにそれは不是吗。僕は十七歳の高校二年生ですから」

「なんだ、同級生だったんじゃないですか」

「え？ 早苗さんですか？」

まさかこんなところで同年代の人に会えるとは思わなかった。

「はい。私もつい先日まで高校二年生でした」

「へえ、そうだったんですか。なんか幻想郷に来て、外の世界の話が出来るのって、新鮮ですね」

「そうですね。私たちはもう外の世界の人と話せることなんてないと思ってましたから」

「同じ年で同じ職業で同じ幻想郷にいるのに、こっちに來た理由がぜんぜん違うってのも面白いぜ」

一人で暇そうに部屋の隅で寝転がっていた魔理沙は突然話の中に入ってきた。

「そういえば、早苗さんは自分の意思でこちらに來たんですよね？」

阿求さんの質問を、文さんが代わりに答える。

「そうですね。早苗さん・神奈子さん・諏訪子さんの三人はこの守

矢神社ごとこの山の頂上にきたんです」

「神社ごとですか？」

「はい。神社ごとです。それに、神社の裏にある湖も一緒に。神奈子様と諏訪子様がどうしてもというので」

早苗さんがあまりにもすんなり言うので、僕は驚いた。

「幻想郷に、土地ごと来ることができるのでしょうか？」

「いや、それならあの紅魔館も土地ごと幻想入りしてますよ」

僕の疑問に即座に文さんが答える。

「ああ、そういえばあいつらも土地ごと幻想入りしてたなあ。実際任意で幻想入りってどうすればできるんだ？」

魔理沙がダラダラしながら会話に混ざる。

「えっと……、私はよくわかりません……。神奈子様か諏訪子様に聞けばわかると思いますが……」

と、そのときである。

突然ガラリと障子が開けられた。

「あ、神奈子様。おはようございます」

「おはようございます。神奈子さん。お邪魔してます」

「おー、お邪魔してるぜー」

「初めまして。八坂様。私、人間の里の稗田家当主の稗田阿求と申します」

と、僕以外の全員が誰もいない廊下に挨拶をしていた。

「……えっと、みなさん、誰に挨拶を……？」

僕は不審に思っ、聞いてみた。

「あやや？もしかして静さん、神奈子さんが見えてないのでしょいか？」

「……と、いうと？」

僕は意味が分からなくて文さんに聞き返した。

「その廊下にここの神社の神様である、八坂神奈子様が来ているのですよ」

そういわれて、僕は再び廊下を見た。

誰もいない。

「もしかして、静さんは外の世界から来たので、妖怪のようなものは見えても、神様は見えないのではないのでしょうか？　どうなのでしょう。早苗さん」

「うーん。まあ、外の世界の人の大半は、神様を見ることが出来ない人ですからね。でも静葉ちゃんたちは見えてたんですよ……やっぱ、信仰心が足りないのかな……」

早苗さんは考え込んでしまった。

「ちなみに、さっきから神奈子さんが喋っていることも聞こえないのでしょうか？」

「え、あ。はい。そうですね。僕には完全にその神様は見えたり聞こえたりしないですね……」

僕と文さんがそう会話していると、早苗さんが考え込むのを止めて、どうやら八坂様らしき人（見えないので分からない）と会話をしていた。

「はい。わかりました。では、ちょっと私は席を外させていただきます」

「あやや？　どうしたんでしょうか？」

立ち上がる彼女を文さんが尋ねる。
すると、彼女はこう言った。

「神奈子様の秘策だそうです」

十九話（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

書き溜めてた分がこれで終わってしまいました。

本編を何話か書くまで次から番外編を公開したいと思います。

これからもよろしく願います。

番外編・もこまこ1話（前書き）

注意。

この番外編は、東方幻想郷物語本編を執筆中にm i x iで妄想デートバトンと言うのを貰ったときに、デートをするなら妹紅だろう。と思って、しかもどうせやるなら小説形式でやってやろうと思って、書き始めたものです。まあ、妄想デートとか言いつつ、今回は告白編です。

この小説は本編のような結構原作設定寄りの小説ではなく、かなりオリジナル設定溢れる小説となっております。それをご了承の上、お読みください。

あ、ちなみにこの小説が真の初登場話です。

番外編・もこまこ1話

第一話

初めて妹紅とであったのは、僕が迷いの竹林と呼ばれる場所で迷ったところを助けてくれた時だ。あの頃は、自分の事なんか全然喋らず、竹林から抜け出さしてくれた時も「もう迷うなよ」とだけしかいわずに背を向けた。

それから僕は彼女に会うために迷いの竹林に毎日行った。そのたびに彼女は見つけてくれた。

彼女はいつも面倒くさそうに僕を見つけてくれたけれど、だんだん色々と話してくれるようになり、自分が不老不死である事や、炎の操る事が出来る事も教えてくれた。

そのうち、彼女は僕を自分の家に招待してくれるようになった。竹林の中にポツンと立った掘っ立て小屋だったが、彼女は不便することなく生活できているようだった。

「そうだ。お前にこれ、渡しておくよ」

そういつて妹紅は僕に一枚の紙をくれた。

「お前、まだここに一人でこれないだろ？一応の地図」

その紙には普段の男っぽい話し方とは裏腹に綺麗な可愛い字で地図が書いてあった。

「ありがとう。大事にするよ」

「まあ、大体アタシはここににいるから。迷ってもすぐに探しにいくだろうし」

「うん。ありがとう」

「よし。そうだ。夕飯食べてくか？」

「うん。じゃあ、そうするかな」

そうして、妹紅は僕に背を向け、台所に向かおうとした。

「なあ」

と、そこで妹紅は僕に背を向けたまま声をかける。

「お前、アタシといて楽しいか？」

突然そんな事を切り出してきた。

「うん。楽しいよ」

「お前は——」

妹紅は、そこで一度とめる。

「アタシの事——」

また、時が止まる。

静寂。

家の周りにある竹が風に揺られる音が聞こえる。

「い、いや、なんでもないんだ。忘れてくれ」

妹紅はこっちを振り返っておどける。

「さあ、飯を作ろう。飯だ飯。腹減っちゃったぜ」

そうして妹紅が背を向けようとした瞬間に——

「——好きだよ」

僕はそういった。

三度、時が止まる。

「僕は、妹紅の事が好きだよ」

繰り返し。

僕の想いが伝わるように。

繰り返し。

僕の心が伝わるように。

「バツ、バカ。アタシは不老不死だぜ。所詮お前とは同じ時間を歩めないんだぜ」

僕の方を向いた妹紅の目には涙が溜まっていた。

そんな妹紅を、僕は愛しくなって抱きしめた。

「大丈夫。僕と妹紅は、今、この時間、一緒にいられるから」

「ば、ばかやろう……」

僕の背中に妹紅の腕が回ってきた。

僕は、妹紅をきつくきつく、抱きしめた。

番外編 — もこまこ2話

今日はとある事情により、慧音先生が一人で仕事をする日なので、僕は朝から暇であった。

寺子屋での仕事がないと家にいても暇なので、昼過ぎから妹紅の家に行くことにした。

妹紅の家に行くためのルートは、以前妹紅がくれた地図があったので、迷わずに妹紅の住む掘っ立て小屋に行く事が出来た。迷わず妹紅の家にたどり着く事が出来たのはこれが初めてである。いつもは地図がないので、すぐ迷ってしまい、そのたびに妹紅がどこからともなく現れてくれる。いや、しかしこの地図凄いな。結構簡単にこれたぞ。

「妹紅！いるか？」

戸を叩くと、中から調子の抜けるような返事が返ってきた。

「ふあい？どちらさまあ？」

そう言つて、妹紅が目をこすりながら戸を開けた。どうやら寝ていらしい。これは今起きたのか、それとも昼寝なのか。

とりあえず、出迎えた妹紅は寝巻きだったので、今起きた事が分かる。っていうか、昼過ぎまで寝てるのか。

「やあ。おはよう妹紅。今お目覚め？」

.....

僕の挨拶を聞いてるのか聞いていないのか。しばし硬直する妹紅。

「……………」

と、言葉にない驚きを見せたかと思うと、激しく戸を閉めた。

「——ちよつ！……ちよつと待ってろ！……着替えてくるから！……ぎゃん！」

慌てすぎてこけた様だ。

「もこうー。だいじょうぶかー？」

「大丈夫!!!! 大丈夫だから!!!! 入ってくるな!!!!!!」
と、そんなこんなで僕は家の前で数分待たされたのだった。

「全く、来るのが突然過ぎるんだよ」

普段着に着替えた妹紅は家に僕をあげてからそんな事ばかり言っていた。

「ところで、今日はどうしたの? 昼間で寝てるなんて」

「いや、なんか夜中に永遠亭に行きたがってる人が迷い込んできたからな。自警団の仕事だよ」

「真夜中に……? 急患?」

「ああ、そうだ。っていうか急患じゃなかったら真夜中になんか来ないだろ」

「そうだよね……」

とか何とか話をしたり、二人で暇つぶしをしたりしているうちに、いつの間にか夜中になっていた。

「夕食、食べていくよな?」

「うん。もちろん」

僕が妹紅の家に行く時はほとんど夕食を食べて帰る事が多い。妹紅はボーイッシュな雰囲気だが、家事全般が得意で、料理なんて僕より上手い。

妹紅、藤原妹紅はとある出来事から、不老不死の体となったのである。これの詳しい事情は未だ聞いていないが、彼女は不老不死の身体で既に千年は生きているらしい。不老不死と言っても、普段は普通の人間と同じである。だが、死ぬ事が出来ない。普通の人間で言う、死ぬ状況に陥ると、元の元気な身体に戻るのだ。その年月の内に、彼女は炎を自由に扱うという不思議な力を手に入れたのだ。彼女はその炎を扱う能力で、今何をしているのかというと、料理をしている。

かまどにそのまま炎を入れて、自由に火力を調節し、料理をするのである。薪とか不要である。地味に便利。

妹紅は僕に振った。無茶振り過ぎますよ妹紅さん。

「真おおおおおおお！！！！！！！！」

「ちよっ……、慧音先生！！！！待って下さい！！！！落ち着きましよう！！！！！落ち着いてください！！！！！危ない！！！！その角危ないからっ！！！！！！！！」

「慧音。危ないからやめろよ。真は普通の人間なんだぞ」

「う……ん。まあ、そうだな。まあ、取り乱してすまなかった。とりあえず、事情を聞こう」

「どうやら、慧音先生は熱を下げてくれたようだ。」

「まあ、事情も何もない。よく飯を食べに来るしな」

「そんなになのかっ！！！！！！」

「ああ、そうだよ。だって………アタシ達……付き……合っ……て………るんだもん」

妹紅の台詞はところどころ小さく聞こえた。じぶんで言うておいて恥ずかしいのだろう。

その台詞を聞いた慧音先生は固まっていた。

「あれ？慧音先生？どうしたんですか？」

「真貴様ああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！妹紅になにをしたああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

凍結状態を解除した慧音先生はまた僕に怒りをぶつけてきた。

「まって！！！！僕何もしてませんよ！！！！！！」

危なく角が生えた状態の慧音先生に頭突きをされるところだった……。

慧音先生を落ち着かせて僕たちの関係を説明し終わった頃には、もうかなりの時間が経った頃だった……。

番外編・もっこ3話（前書き）

妄想デートバトンの本編がこれです。3話にて、ようやくデート本編というわけの分からない構成。

番外編・もこまこ3話

告白をしたとは言っても僕たちは特に今までと変わらず、毎日僕が妹紅の家に行き、ご飯を食べたり、他愛のないことを喋ったりする毎日だった。

今日は朝から妹紅の家に行っていた。

「そういえばさ」

「ん？なんだ？」

「慧音先生が、たまにはこっちに顔を出せて言ってたよ」

僕は慧音先生・上白沢慧音が教師を務める寺子屋のお手伝いをしている。今日は寺子屋が休みの日だったので、朝からこちらの来ているのだ。

「ああ、最近行ってなかったな。前の満月の日にはあっちから来てたもんな」

「うん」

「じゃあ、昼飯食べたら行くか。ついでに里で買い物でもするか」

「オーケー」

そう言って、妹紅は昼食を作り始めた。

ここは人間の里、幻想郷にすむ人間が住む場所となっている。一部、違うところにすんでいる人間もいるらしいけれど、少なくとも僕の家はここにある。

「うーん。人間の里に来るのも久しぶりだなー」

「一ヶ月くらい来なかっただけで、久しぶりって……」

「いやあ、だって。ねえ」

「少なくとも、長生きしてる人間が言うことじゃないよね」

「う、うるさいなあ!!」

と、そんな話を話しながら歩いていたら、突然背中を誰かから突き飛ばされた。

「こーら。何をそんなにイチャイチャしながら歩いてるんだ。こっちが恥ずかしくなるだろうが」

後ろを振り向くと、慧音先生が立っていた。慧音先生が後ろから得意の頭突きをしてきたようだ。

「まったく。妹紅も妹紅だ。本当にこんなヤツでよかったのか？」

慧音先生は呆れ顔で言う。

「ちよっ……慧音先生……こんなヤツって……」

「うん。アタシはコイツと同じ時を歩くって決めたんだ」

慧音先生の問いに、妹紅は満面の笑みでそう語る。

「……ふう。まるでバカップルだな。せめて里にいるときくらい自重してくれ」

ため息を付きながらそう言った慧音先生は僕たちを通り過ぎていく。

「後で私の家に来いよ。渡すものがあるからな」

ある程度はなれた後、慧音先生は振り向いた。

「今付いてくるなよ。私だって他に色々用があるんだ。時間を空けてからきてくれ」

「あ、うん。分かった」

慧音先生は向き直って、そのまま人ごみの中に消えていった。

「じゃ、先に買い物でも済みますか」

「そうだな」

それから、僕たちは食料や足りなくなった生活用品を買い溜めし、もちろん荷物持ちは僕になった。（お金は妹紅がたまにやる自警団の仕事などで入った収入がある）

妹紅は荷物もちになってる僕の事なんかお構いなしに次の店へと向かう。

すると、妹紅が突然ある店の前で立ち止まった。

それがあまりにも突然だったので、一緒に並んで歩いていた僕は妹紅より行き過ぎてしまった。

「おっと……、どうしたんだ？妹紅」

妹紅の視線の先には呉服店があった。そこには、綺麗な着物が飾られていた。

「おい。妹紅ー。もこーう」

呼んでも気がつかない妹紅を何度も呼ぶ。すると、

「え？あ、あ。なんだ？どうしたんだ？」

「その着物が欲しいのか？」

「え？いや、なんでもない。なんでもないんだ」

妹紅はかたくなにしらを切る。

僕はその着物の値段を見てみた……。うわ。高い……。こりや僕の貯金全部出してもちよっと手が出せないくらいだなあ……。

「さっ、次行こうぜ次。次は霧雨商店だ」

妹紅は僕を置いてスタスタと歩き出した。

と、妹紅は前をよく見てなかったのか、

「うわっ」「きゃっ」

と誰かとぶつかってしまった。幸い、向こうの人もこちらとも倒れなかったようだ。

「おい。妹紅……あ」

僕が駆け寄ると、そこには見慣れた人……たち？がいた。

「あら、妹紅と、彼氏さんじゃないですか」

「八意さん。こんにちは」

八意永林。妹紅が暮らしている竹林の更に奥へと足を運ぶと存在する永遠亭に住む薬師である。今日は同じ永遠亭に住む兎の妖獣と一緒にある。たしか因幡てゐとか言う名前だったはず。ちなみに兎と言っても二足歩行で、ほとんど兎の擬人化と同じような見た目である。

「こんにちは。今日はデートですか？」

デート???? いやいやいや、そんなことない。僕たちは慧音先生に呼ばれて来たついでに買い物しているだけのはず。

「え?! いや、そ、そんなこと、ないです!!」

妹紅は激しく取り乱している。

かくいう僕も突然デートなどと言われて、動揺しているんだが。

「あら。ちがうのかしら」

「そんな事ないって、お師匠様。きっとデートと言えるデートなんてしたことはないから取り乱してるんですよー」

「うふふ。そうね」

「それとお前」

突然兎に指差された。

「まさか妹紅に手を出す人間がいるとは思わなかったけど、あまり竹林の中でイチヤイチャするんじゃないよ。たまに機嫌がよくて外に出てくる姫様がすぐに機嫌悪くなっちゃうんだから。イチヤイチャするなら屋内で。オーケー？」

まさか兎ごときにそんな事言われるとは思わなかった。

「あ、ああ、とりあえず、オーケー」

適当に返事をしておいた。

「よし。分かったならいい。じゃあお師匠様。置き薬の点検の続きをさっさと済ませちゃいましょう」

「はいはい。わかりましたよ。それでは、お二人さん。さようなら」

「「さようならー」」

二人は突然のように現れて突然去っていった。

その後の、僕たちの気まずさと言ったら……。

僕たちはしばらくその場から動けないでいた……。

「なあ……」

僕らの沈黙を破ったのは妹紅だった。

「これってさ……」

妹紅の声は、いつもより小さい。

「やっぱり……デー……ト……なのかな？」

途中、消え入るような音量になるが、僕には聞き取れた。

「そう、なのかもね」

僕がそう答えると、

「フフッ」

妹紅は笑い出した。

「はっははははは」

「ちょっ、妹紅、どうしたんだよ」

「デートってこんな簡単なことだったんだな。なんか前から悩んでいたアタシが馬鹿みたいだったよ」

そして妹紅は笑う。

それにつられて、僕も笑う。

「うん。そうだね」

「さっ、じゃあ次行くぞ」

そうして、僕たちはデートを楽しんだのだった。

番外編・もこまこ4話

「ねえ、てゐ」

「なんだい鈴仙」

「最近、姫様が元気ないけど、何かあったのかね」

「はあ……。鈴仙はやっぱり何も知らないんだね」

「やっぱりってなによ」

「いや、改めて無知だと言う事がわかったから」

「ちよつと、それひどくない？」

「だって、姫様の元気が無くなった理由なんて一つしかないですよ」

「だからそれは何？」

「それを知らないのは永遠亭で鈴仙だけですよ」

もこまこ恋愛小説 四話 心の壁

本日は、月に一回の姫様と妹紅の死合いの日。

やっと来たはずの死合いの日なのに、姫様は元気がない。

てゐは理由を全く教えてくれなかった。あれだけ馬鹿にするのだ。理由は知っているはずである。だが、なぜか教えてくれない。何故なんだろう。

「はあ……。てゐが言う事聞かないのはいつものことか……」

そんな事をぼやきながら永遠亭の廊下を歩く。

向かう先は、姫様の部屋。

死合いの付き添いはローテーションで決まっており、先月はてゐと一緒に竹林まで行ったので、今月は私の番である。

——正直、嫌なんだよなあ……。

付き添いで死合いの場所まで行くという事は、すなわち姫様と妹紅が戦っているところにいなくてはいけないという事で、すなわち戦いに巻き込まれないように逃げなくてはいいけないという事で、すなわち二人の戦いで出る人の肌が焦げる嫌な臭いがかがなくてはいいけないという事で、すなわちこちらが負けた場合の死体を片付けなければいけないという事である。

主に最後の理由から、死合いの付き添いはあまり好ましくないものである。しかし、蓬萊の薬を飲んだ姫様が、生きていると実感する時が、妹紅と死合いをして命の削り合いをしている時なのである。それは、姫様の生きがいなのである。

全ての時間が止まってしまった。姫様の。

永遠の時間を生きることになった。姫様の。

死ぬことが出来なくなってしまった。姫様の。

生きがいなのである。姫様の。

そのことを、私は知っているから。知っているからこそ嫌でも。嫌でも私は死合いの付き添いを辞めた事はないのである。

姫様が大切だから。月から逃げてきた私を匿ってくれた。大切な人の生きがいを大切にしたい。私はそう思う。

だから、私は、今、姫様の部屋のふすまを開いた――。

「私、今日はいきたくないわ」

姫様の第一声はそれだった。

「ですが、今日は月に一度の死合いの日ですよ。行かないと行かないで妹紅がこっちに来るかもしれませんよ」

「行きたくないの」

その後もかたくなに「行きたくない」を連呼する姫様を何とか説得して、私は姫様を外に出す事に成功した。そして、しぶしぶついて来る姫様をいつも死合いの場所となっている竹林の中にある少し開けた場所まで連れて行く。

「なによお。私は行きたくないのにい」

まだこんな事を言っている。

死合いの場所に近づくと、場所には人影が見えた。妹紅だ。

と、そこにはもう一つ人影があった。私はその時、どうせ慧音だろうと思っていたが、近づくとびに聞こえてくる声から、それが違う事がわかった。

「だーからー。ついて来るなって行っただろー」

妹紅の声だ。相手が慧音だったら、ここまで拒む事はないはずだ。以前にも、私同様付き添いを任されていた時があったはず。

「今日は死合いの日なんだよ。こっちが来ないと怒ってあっちが家までやって来るかもしれないんだ」

「でも！」

その叫び声が、妹紅の声でも慧音の声でもないことに私は違和感を覚えた。では誰なのだろうか。

「でも！僕は妹紅に、永遠亭の姫と戦ってほしくない！」

「そうは言ってもなあ……」

ふと傍を見ると、姫様がついてきてない。振り返ると、姫様はそこにいた。が、歩を進めようとしな。

「姫様？どうしたんです？やっぱり行きたくないとか言わないでくださいよ」

私がそう訪ねても、姫様は何も言わない。その代わり、後ろから声が聞こえる。

「僕は！妹紅が傷つくところを見たくない！」

「だからー。アタシは不老不死だからー」

「僕は、妹紅にこれ以上傷ついてほしくない！」

そうか。妹紅に彼氏が最近できた。永遠亭のウサギたちが騒いでいた。つけ。

彼の出現によって、姫様は元気がないのか。妹紅が、敵対しながらも永遠の時間を一緒に歩く妹紅を取られた。そう思って。

——ということは、彼が姫様の不機嫌の元なのか。

そう思ったのが最後、私は、妹紅たちのところに駆けていった。二人が驚いてこちらを向く、私は、男めがけて駆ける。

——こいつが、私の姫様の生きがい——

そして、私が男に手をかけようとしたその時。

その手は、妹紅に握られていた。

「おいウサギ。お前は輝夜の付き添いじゃないのかよ。なぜ真に手を出そうとする」

「それは……」

「いいのよ。鈴仙。妹紅」

後ろから姫様の声がした。

「姫様っ……」

私は振り向く。姫様に請うように。

姫様は、私たちに近づきながら私に言葉をくれる。

「いいのよ、鈴仙。私のためにしようとしてくれたのでしょうか」

姫様が、私のそばまでやってきた。

「妹紅。放してあげて」

「だが……」

「鈴仙、いいわよね」

妙に威圧のかかった声で姫様は言う。

「はい……。姫様……」

私は腕にこめた力を抜いた。すると、

「チッ」

といいながら妹紅は私の手を放した。

「鈴仙、下がってなさい」

私は仕方なく下がる。

「妹紅」

姫様が妹紅に声をかける。

「なんだよ。真には手を出させないぜ」

「わかってるわよ。今夜はそれも含めて、もう決めるわ」

「何のことだ」

「私は、もう貴女と死合いはしないわ」

「なっ……!! どういうことだよ!!」

「貴女は、もう新しく生きる意味を見つけたわ。貴女には、貴女が傷ついて欲しくないと思っている人がいる。だから。私はもう貴女と死合いはしないわ」

「そういう、お前は どうするんだよ。お前だって、お前だってこれが生きがいったんだろ」

「私には」

姫様は私のほうを見る。

「もういるもの。私に傷ついて欲しくないと思っている人が」

そういつて、姫様は笑った。

「ふん。お互い様って事か」

「ええ、そうね」

そして、二人して笑った。

「というわけで、今日のところは帰るわ。鈴仙。帰るわよ」

と、姫様は踵を返すとさっさと飛んでいってしまふ。

「あ、はい。わかりました」

私がついていこうとすると、姫様は突然こちらを振り返り、
「妹紅！」

と叫ぶ。

「ああ？なんだよ」

後ろから妹紅の声がする。

「お幸せにね」

姫様はそういうと、進行方向に向き直って飛んでいった。

私は、そんな姫様を追いかけた。

「だってよ。あの輝夜がだぜ」

「だね。いいんじゃない？いい結果で終わって」

「あのなあ。お前殺されかけてるんだぞ。そこらへんわかってるんだろうな」

「いや、わかってるよ」

「お前はアタシと違うんだから、無茶しないでくれよ……。お願いだ」

「うん。わかった」

「お前はアタシの大切な人なんだから……」

「……ごめん。心配させて」

「なら二度とするなよ。……まったく」

番外編・もこまこ4話（後書き）

夏コミにて、東方幻想郷物語の総集編を作りたいと思うので、それのための加筆訂正やら編集作業やら次話の執筆やらで当分次話は投稿できなくなると思うので、ご了承をお願いします。

半年くらい投稿がなくても打ち切りなわけではないです！！一応ラストまでのプロットは出来ているので、意地でも完成させるつもりです。

二十話（前書き）

お待たせしました。本編の続きます。

二十話

「お待たせしました」

そう言って、早苗さんは僕たちがいる部屋に戻ってきた。

彼女の手の中には細長い桐の箱があった。

「ん？なんだそれは。まさかレアアイテムか？」

暇そうに寝転がっていた魔理沙が桐の箱を見たとき、たん目の色を変えて立ち上がった。

「違いますよ。これはですね……」

早苗さんはさっきまで自分が座っていたところに再度座り、箱のふたを開けた。

そこには、一枚の御札が入っていた。

「おふだ……ですか」

文さんがそう言うのと、続けて喋る人がそこにいるかのように誰もいない空間に皆の視線が向く。たぶんそこには八坂神奈子様がいるのであろうが、僕には姿を見ることがも喋っている事も聞こえない。その神奈子様の声を聞いてからなのか、魔理沙が呆れたように僕の横に座った。

「あの……、もしかして神様が喋ってますか……？」

僕は恐る恐る聞いた。

「あら、そうでしたね。ごめんなさい……。では先にこれをお渡ししましょう」

早苗さんは慌てて御札を僕に渡してくれた。

持ってみた感じとしては、まあ、ただの御札である。これが何だと言うのだろうか。

「どうだい？これで聞こえるかい？」

突然聞きなれない声が出た。

「え？今誰か喋りましたか？」

僕は部屋の皆に尋ねる。

「ふうむ。流石にまだ姿は見えないようだね」

と同じ声。

「そのようですね」

文さんが聞きなれない声に応じるかのように話しだした。

「その声は、神奈子さんの声です。恐らく、その早苗さんが持ってきた御札になにか仕組みがあつて、声を聞くことが出来るところまでできたようですね」

「はい。そうです。それは、神奈子様の御力が込められた御札になっています。それによって、静さんはそれを身につけてる時だけ神奈子様の存在を認識できます。神奈子様に対する信仰心があればあるほど、認識力は大きくなり、普通の人間である静さんも姿が見えるようになると思います」

「それと、それに伴って、私の札の力も使えるようになるからね」
声だけしか聞こえないとガチで神様に思えるから凄い。というか札の力？

「札の力っていうとどういう事ですか？」

「主に、風を操る力だね。簡単なものだと言を飛ぶ事が出来る」

「え？文さんみたいにですか？」

「ああ、そうさ。早苗も昔はこれを媒体に飛んだりしてたもんだ」

「や、やめてくださいよ、神奈子様。私の昔の話は」

早苗さんは顔を赤くして慌てて神奈子様の声を遮るが、それを見て神奈子様は更に続けた。

「あつはつは、いいじゃないか早苗。まあ、早苗は元々の力が強かったからそこまで必要としなかったんだがな、でも重要な風祝の儀式の時にはちよくちよくそれを利用してたんだよな」

「ふむふむ。これは新しい情報ですね。記事にできそうです」

「そうですね。霊夢さんはそういう事をあまり話してくれませんか
らね」

文さんと阿求さんが、早苗さんの情報を手帖にメモし始めた。なんだこの二人は。

「ふーん。まあ、そういうものなら私は要らないからなあ」

と言って隣に座っていた魔理沙は僕が持っている御札を眺めながら言った。

「ところで、この御札は僕が持って帰ってしまったてもいいんですか？」

神奈子様がいると思われる場所の隣に座ったばかりの早苗さんに向けて尋ねた。

「はい。どうぞ、持って帰ってもいいですよ。ですが、大事にしてくださいね。私にとっても、神奈子様にとっても大切な物ですから」「分かりました。大切にしますね」

そう言って、僕は早苗さんから貰った御札を大切に懐にしまった。「ところで、天狗御一行のこの後の予定はあるかい？よかったら、ウチで昼食はどうだい？」

「あやや、よろしいのですか？」

「ああ、別に大丈夫さ。他のみんなも大丈夫かい？」

神奈子様の誘いに対し、皆も文さんに続いて、

「はい。ぜひ一緒に過ごさせてください」と阿求さん。

「おーけー。いただくぜ」と魔理沙。

なんだか気がつかないうちに食事の話が進み、僕としても基本的にはただ文さんについてきただけなので、僕も一緒に過ごしていただけ事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7039f/>

東方幻想郷物語

2010年10月10日04時25分発行